



川を活かす・守る ～河川再生事例集～



編集 日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN)

発行 公益財団法人リバーフロント研究所

本書は、**宝くじ**の社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。クーちゃん **宝くじ**



はじめに

本事例集は、日本各地で市民等により実施された河川再生の取り組みを紹介するものです。身近な河川・水辺の再生にむけた取り組みは、成熟度や規模の違いがあるものの、日本のみならず世界各地で盛んに実施されています。

日本河川・流域再生ネットワーク（JRRN）では、こうした取り組みに関する情報を収集し、広く一般に伝えることを目的の一つとして活動しています。

今回ご紹介している事例は、実際に河川再生に取り組まれている JRRN 会員の皆様より、活動を始めたきっかけと目標、具体的な取り組みと協働する仲間、活動の現状や今後の展開などの視点から原稿を執筆いただいたものです。

本事例集でご紹介する事例以外にも、国内外では多くの河川再生に向けた取り組みが実施されています。読者の皆様からのご意見や更なる情報提供をお待ちしています。

本事例集を通して、「河川再生」という取り組みに興味を持っていただくとともに、この河川を見に行ってみたい、活動に参加したい、活動を始めたいと感じていただけたら幸いです。

本事例集の作成にあたっては、河川再生という共通の目標に向けて活動されている全国の市民団体、行政の方々に原稿を執筆いただきました。また、事例紹介に関する写真をご提供いただいた方々にもこの場をお借りし、感謝の意を表させていただきます。

日本河川・流域再生ネットワーク（JRRN）

◆本事例集作成の趣旨

川は古くから、漁業や舟運、水利用、行事など地域住民の生活と密着した場でした。しかし、社会の産業経済の発展や交通などの社会基盤整備の進捗・高速化に伴い、全国の川でみられた直接的に生活の糧とした産業や舟運などは衰退しました。昭和30年代から昭和40年代頃の高度経済成長期には、生活や工業廃水の流入等により全国的に公害や水質問題が顕在化し、川と人の生活はより一層隔たりました。

一方で顕在化した公害や水質問題は人々が河川再生の必要性を認識する契機ともなりました。

昭和50年代の水辺空間の価値の再認識を背景にした「親水性の向上の取り組み」にはじまり、昭和60年代に

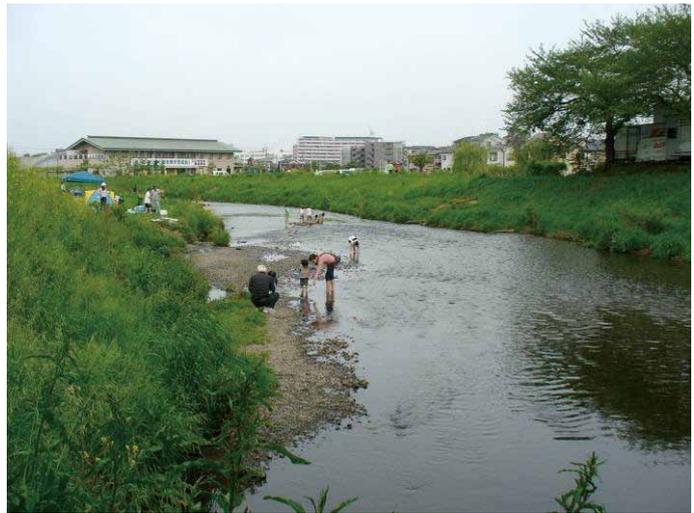


は河川とまちづくりといった具体的な課題が多様化する国民ニーズや時代背景がクローズアップされ、地域住民と行政協働による川づくりの先駆けとなった「ふるさとの川整備事業」、「マイタウン・マイリバー整備事業」が全国で展開されてきました。

これらの事業は河川再生の方向の1つとして、大きな貢献をし、最近では地元住民、地方公共団体や河川管理者の連携のもと、良好な街と水辺が融合した空間形成の推進を図る「かわまちづくり支援制度」に引き継がれています。

この背景には、川の持つ自然環境の保全や水質改善、川を利用したレジャーなどへの市民の関心の高まりがあります。地域の個性や活力、歴史・文化が実感できる川づくりには、行政だけでなく、川を利用する地域住民など様々な人々の力と英知を集めた継続した河川再生活動が求められています。

本事例集の扱う「河川再生に関わる活動」は、市民が川に親しみ川の環境を活かした環境教育などの活動、自然環境や生物を対象とした再生の取り組みを含めています。それらは、市民の自主的な活動から川の環境を再生するに至ったもの、人々に川への関心、興味を広げたもの、行政らとともに環境再生を行う仕組みを構築したもの等、様々な河川再生に関わる活動を掲載しています。

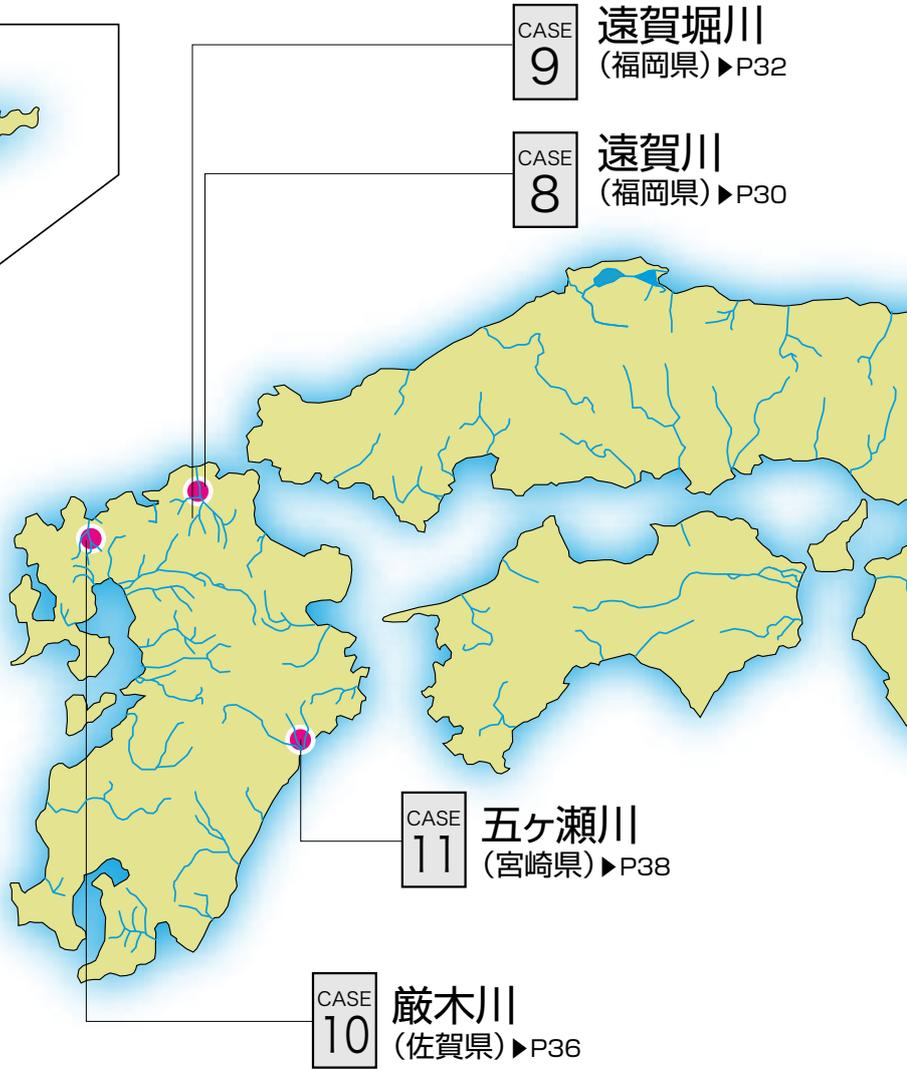
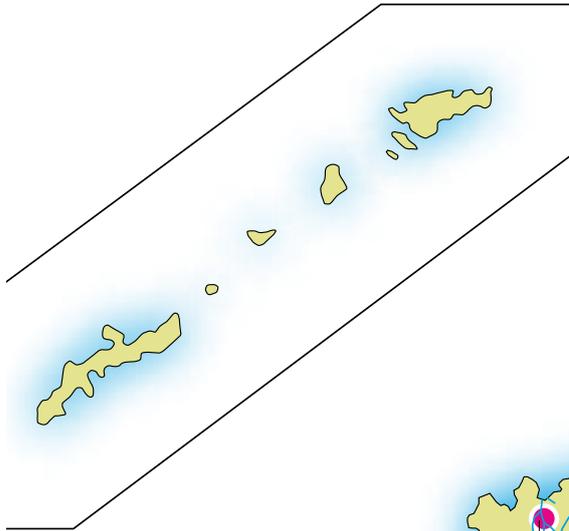
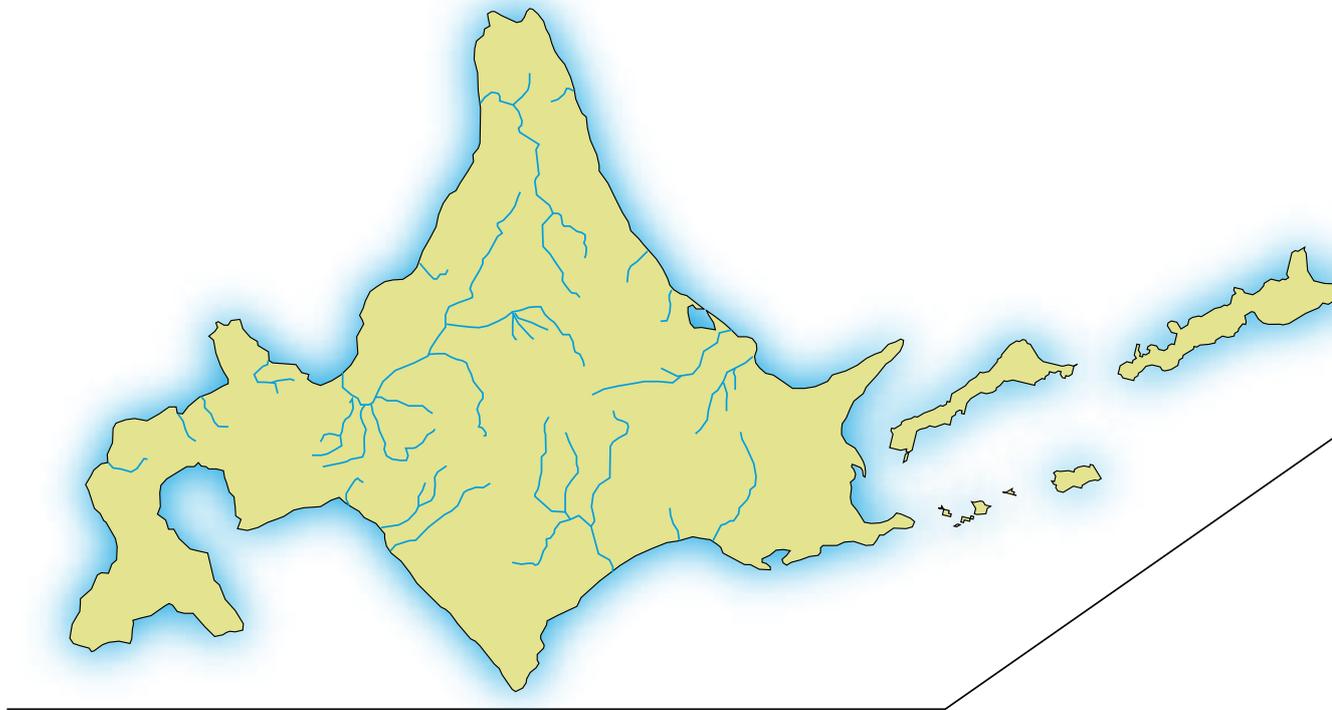


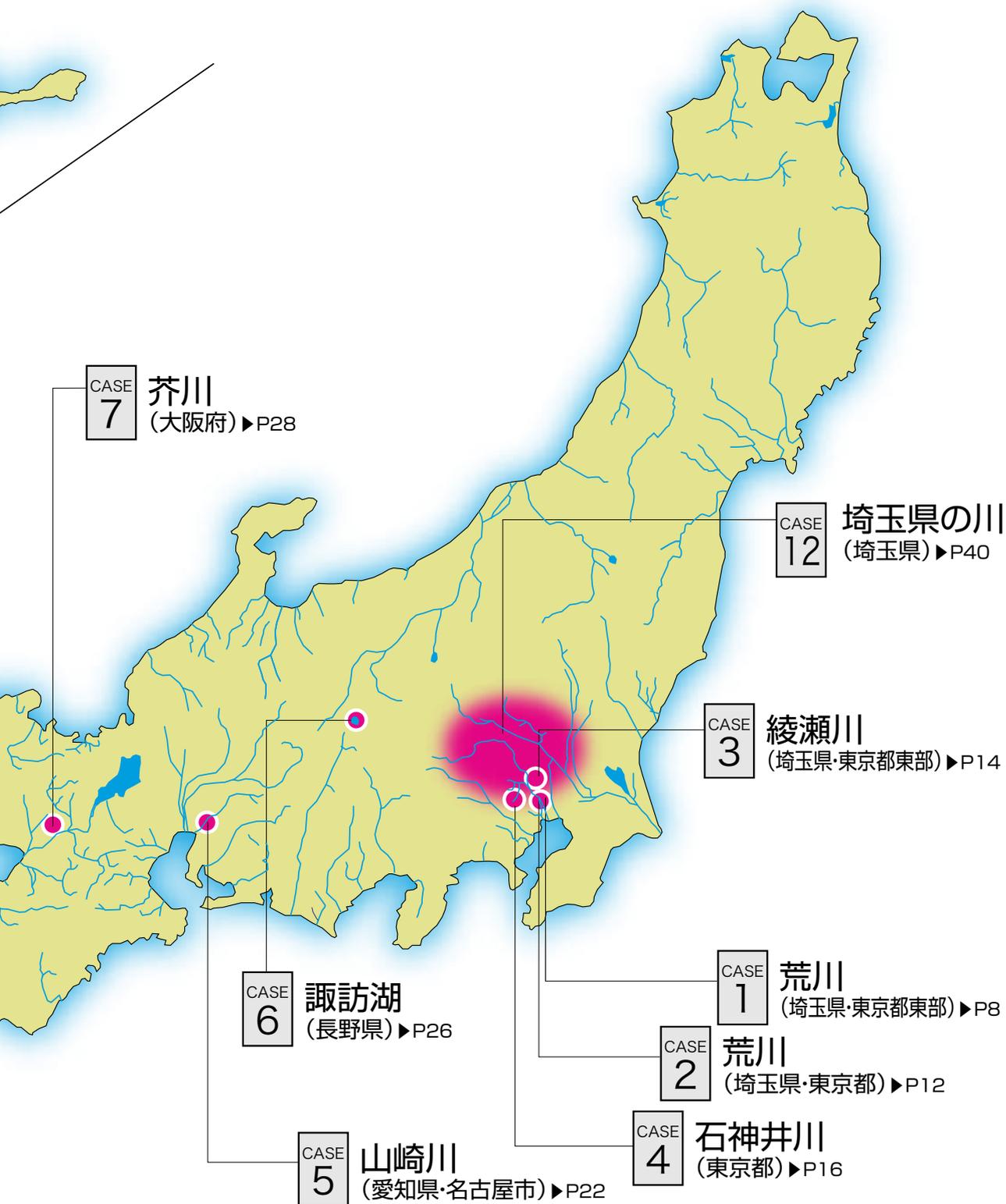
いずれの活動の紹介も活動した本人により、執筆されたもので、活動を始めた経緯、その成果、新たな活動展開への意欲などがつぶさに感じられることと思います。

この事例集は水辺の大切さ、行動を始めることの重要性を広く全国へ発信して、理解と協力の増進を図ることを目的に作成したものです。

次世代に良好な水辺を繋ぐ活動の一層の活性化を図る一助となることを願っています。







事例紹介河川位置図

目 次

	はじめに	28	芥川・ひとと魚にやさしい川づくり 大阪府 芥川
	本事例集作成の趣旨		
	事例紹介河川位置図	30	遠賀川式川づくり直方 福岡県 遠賀川
8	荒川クリーンエイド 埼玉県・東京都東部 荒川	32	子ども達が描く夢の「宝川」目指して 福岡県 遠賀堀川
12	特定非営利活動法人 あらかわ学会 埼玉県・東京都 荒川	36	ふるさとの水文化を守り伝える川づくり 佐賀県 巖木川
14	NPO 法人エコロジー夢企画 埼玉県・東京都東部 綾瀬川	38	五ヶ瀬川流域ネットワーク 宮崎県 五ヶ瀬川
16	川と水辺を楽しむプロジェクト 東京都 石神井川	40	埼玉県における「川の再生」の取組 埼玉県の川
22	“外来種の駆除”名古屋市山崎川の場合 愛知県・名古屋市 山崎川	46	団体プロフィール
		50	参考文献および図・写真出典一覧
26	よみがえれ諏訪湖 ー住民の思いを力に変えてー 長野県 諏訪湖		JRRN とは？

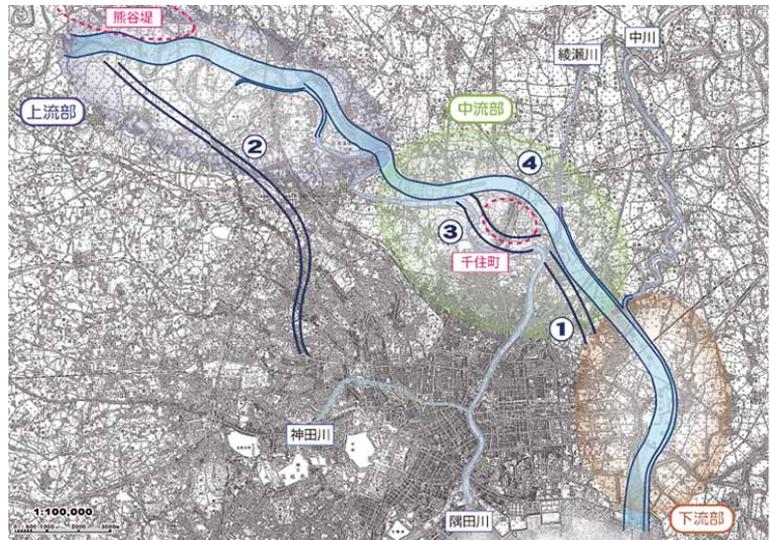
荒川クリーンエイド

荒川は、埼玉県秩父市から東京の下町を流れ東京湾に注ぐ173kmの一級河川です。その荒川の下流部は、東京の洪水対策のために掘られた放水路ですが、着工から約100年を経過して、今では大都市東京になくてはならない貴重な自然と涼風をもたらす自然豊かな憩いの場となっています。

一方で、荒川は東京湾に繋がって低地を流れているために、潮の干満の影響を受けやすく、流れてくるゴミの多くが、川の両岸に広がるヨシ原などに溜まり、水際はゴミで埋め尽くされる状態です。

荒川クリーンエイドはこのような川に溜まるゴミを市民ボランティアで拾ってきれいにし、ゴミによって壊されている自然を元気に回復しようという運動です。「クリーンエイド」はクリーン(=綺麗)にして(自然を)エイド(=助けよう)という意味が込められています。

平成6(1994)年、当時の建設省荒川下流工事事務所(現国土交通省荒川下流河川事務所)が行った荒川放水路の通水70周年を記念する行事の一つとして、市民に呼びかけられて始まりました。その後、市民中心の実行委員会による開催を経て、平成9(1997)年に任意団体「荒川クリーンエイド・フォーラム」を結成し、平成11(1999)年にNPO法人格を取得して活動を引き継いでいます。



放水路地図(国土交通省荒川下流河川事務所HPより)



荒川風景(小松川自然地)



水際を埋め尽くすゴミ



河川敷のヨシの間に溜まるゴミ



うち上がるゴミ

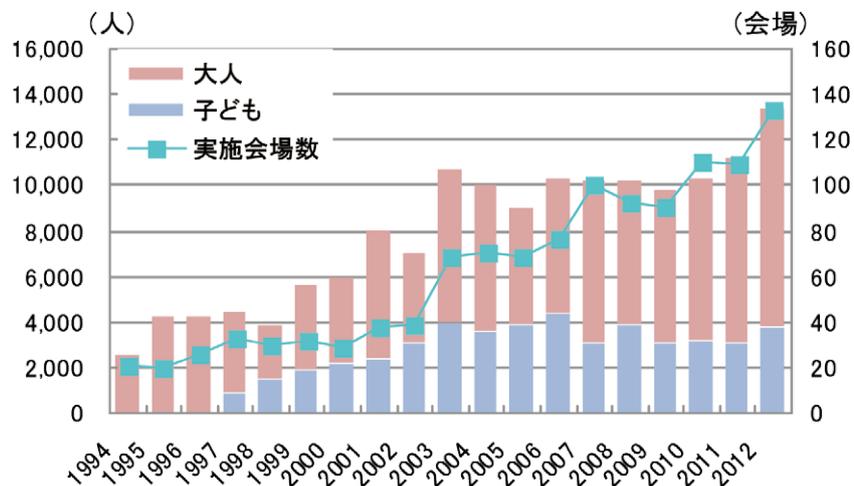


荒川クリーンエイドは、国土交通省荒川下流河川事務所の「荒川下流部ゴミ対策アクションプラン」として位置づけられ、市民、企業、学校、自治体など他セクターが連携して活動が推進されています。回収したゴミの処理は、同事務所と沿川自治体が分担して実施されています。

平成6（1994）年に荒川下流域において21会場、2,600人の参加で始まりましたが、その後、会場数・参加者数とも増え、平成24（2012）年には、133会場で、のべ13,443人の参加で実施されました。1年間で回収したゴミ袋（45リットル）は、合計6,472袋。タイヤ、プラケースなどの粗大ゴミは合計



クリーンエイド活動



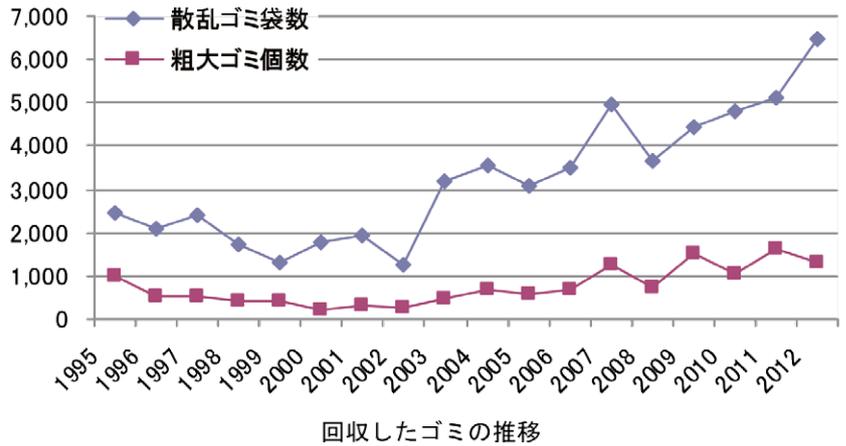
荒川クリーンエイド会場数・参加者数の推移

1,324 個となりました。これまで 19 年の参加者はのべ 15 万人を超えています。また、荒川クリーンエイド実施地域も、当初は下流部で始められましたが、源流域や上流・中流部との交流を通じて次第に広がり、今では源流域の秩父市や中流域の各地でも実施されています。

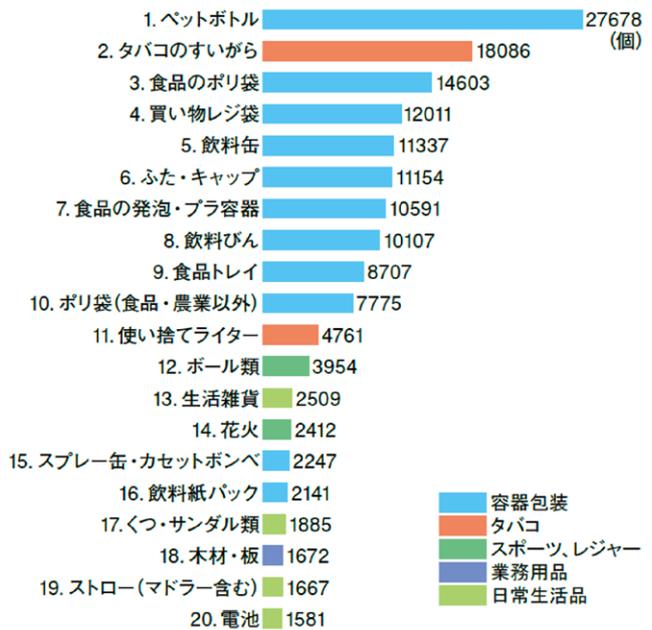
荒川クリーンエイドでは単にゴミを拾うだけではなく、どのようなゴミがどのくらいあるかを数えながら拾います。それはいちいち面倒なようですが、ゴミが捨てられないようにするためのデータを集め、アピールするためです。ここ 4 年間はペットボトルの数が最多となっており、その削減のためのキャンペーンを行っています。また、回収数上位 10 の中でタバコのすいがら以外は容器包装類であることがわかります。

荒川クリーンエイドの実施とあわせて市民による水質調査を実施し、市民の水環境への関心を高めてきました。下流部ではヨシ原や干潟のゴミを取り除いてきれいにする事で、ヨシや底生動物が元気になり水を浄化してくれます。また源流山間部の森林の荒廃や中流域河川敷の不法投棄ゴミによる汚染などは流域全体として対処する必要があり、流域市民が連携して「荒川流域再生シンポジウム」を毎年開催し、連携を深めています。

荒川でゴミ拾いをする最も大きな目的は“クリーンエイド”の名称に示すように自然の再生・生



■ 散乱ゴミ回収数上位 20 (破片類除く)



平成 24 年の荒川クリーンエイド場一覧 (雨天中止会場含む)



小学生の環境学習



ヒヌマイトトンボ

態系 = 生物多様性の保全に有ります。荒川の自然の象徴ともいえるヒヌマイトトンボが、今まさに絶滅の危機に瀕しており、その保護・保全に力を入れて取り組んでいます。汽水域のヨシ原にしか生息できない同種は、ヨシ原の減少などによって生息数が激減しており、手厚い保護が必要ですが、長年保護してき

た国土交通省よりその活動を引き継ぎ、民間の資金を集めて市民で守っていかうとしています。



企業社員によるクリーンエイド活動

荒川に限らず、環境保護のためには、次世代を担う子どもたちに理解を広めることが欠かせません。荒川クリーンエイドは小学生の環境学習にまたとない機会を提供します。自分たちの生活から出るゴミが河川に散乱し、中には外洋にまで流れて生き物を苦しめています。沿川の小学生たちが、荒川でゴミ拾いと生物観察などの環境学習を通して、ポイ捨てをしない大人に育っています。

平成 23 (2011) 年、このような活動が認められ、日本水大賞国土交通大臣賞を受賞しました。



外来植物の除草

平成 23 (2011) 年度から、「東京都新しい公共の場づくりのためのモデル事業」を、地元自治体を含む協議会として受託し、子どもと大人が安全に遊べる自然地の確保をめざして、外来種の除草、モニタリング、自然環境教室にも取り組んでいます。

(文責：特定非営利活動法人 荒川クリーンエイド・フォーラム)

特定非営利活動法人 あらかわ学会



平成 18 (2006) 年
第 8 回 日本水大賞・国土交通大臣賞受賞

明治 43 (1910) 年の大水害を機に、現在の荒川下流部の北区岩淵から江東区砂町地先に至る 22km 間に放水路が開削され、以後首都圏の治水に大きく貢献してきました。今日、荒川はそうした歴史的役割もさることながら首都圏の中であって、広大な水面と緑地を有する自然空間としての価値が見直されています。

「特定非営利活動法人あらかわ学会」は、平成 8 (1996) 年、荒川の歴史的、今日的意義と役割を見つめ直し、荒川(流域)と流域住民との関係のあるべき姿や自然・文化の有様を考え、「多くの人たちに愛される荒川に」を目指して、英知を結集する場として設立され、平成 15 (2003) 年に NPO 法人化されました(現在会員 145 名)。あらかわ学会では、これまで荒川の調査・研究・記録、より多くの方たちに荒川を知っていただくためのシンポジウムやパネル展示、本の出版を行い、川に関する発表の場づくりとして「あらかわ学会年次大会」「川の日ワークショップ関東大会」等を開催しています。これらの活動により、平成 18 (2006) 年には、日本水大賞の国土交通大臣賞「多様な人々が集まる荒川における合意形成手法」という賞を頂きました。

あらかわ学会には、歴史民俗委員会・自然環境委員会・写真委員会・荒川の整備と管理を考える委員会などがあり、それぞれセミナーや出版、写真展などを行っています。

「年次大会」は、あらかわ学会会員の荒川での活動・施策・研究・提案の発表の場であり、任意団体として設立した平成 8 (1996) 年から 17 年間、毎年開催してきました。自然環境・河川土木・歴史民俗・地域社会部門に分かれて、行政・学生・市民会員が同じ場で、同じ持ち時間で発表し、情報交流と互いの活動の質の向上を図っています。

あらかわ学会の呼びかけで始まった「川の日ワークショップ関東大会」は、平成 24 (2012) 年度に 8 回目の大会を迎えました。関東の川・水辺で活動している諸団体が集まって、身近な川や水辺の自慢、あるいは保全活動等への自慢を発表し合います。選考委員には、毎回様々な分野の団体・個人、マスコミ、行政関係者に参加していただいています。地域の市民団体や行政双方の視点から川や水



川の日ワークショップ関東大会
関東の川・水辺なかま集まれ!



自然地管理と生物生息状況の調査

辺の環境保護や改善について、どのように取り組んでいけばいいのか、またどのような事業のあり方が望ましいのかを、その川と常につきあい将来も関わり続ける市民と川を管理する立場とで自由に柔軟に、公開討論方式でグランプリ・準グランプリを決めていきます。そのディスカッションを通して、川の再生とその手法について学びあい、川活動への意欲を分かち合います。毎年、参加者からは川仲間が増え、元気をもたらすと好評です。また、グランプリ受賞者の中からは、その後ストックホルム青少年水大賞をいただくことになった団体も誕生しています。

平成8(1996)年に当時の建設省荒川下流工事事務所(現荒川下流河川事務所)が、沿川自治体と共に制定した「荒川将来像」から10年目にあたる平成18(2006)年、あらかわ学会は3つの自然地で水辺の構造と生物生息状況調査を行い、自然地管理の手法について検証しました。その調査を基に理事会で話し合い、荒川下流河川事務所に対し「荒川将来像計画2010への意見書」を提出し、改定時の参考にしていただくことができました。

明治19(1886)年に現在の足立区江北に植えられた桜は、荒川の五色桜とも呼ばれ、多くの人々に楽しまれていました。明治45(1912)年には五色桜78種の中からサトザクラ11種、約6,000本がアメリカに寄贈され、ワシントンのポトマック川の河畔にはそのうちの3,020本が植えられました。

平成24(2012)年は、荒川堤の桜がアメリカに渡り100周年という記念すべき年であったため、荒川の五色桜と日米さくら交流の歴史を振り返り、地域の遺産である桜と日米交流の絆を次代に継承するために地元の桜研究団体や東京農業大学など関係8団体と共に実行委員会を組織し、パネル展示と記念シンポジウムの開催、小冊子「荒川堤の桜」の出版をしました。また実行委員会と足立区との共催で、100周年記念植樹も行うことができました。

さらに、平成24(2012)年12月1日には、桜の縁のあるポトマック川と荒川の姉妹河川提携を結び交流を活性化させるため、ポトマック川流域州際委員会(ICPRB)とNPO法人あらかわ学会が姉妹河川提携調印式を行いました。これ

からお互いの活動をネットで紹介しあったりしながら、川活動の活性化を図っていかうと考えています。平成25(2013)年1月20日に行われた第8回川の日ワークショップ関東大会には、ポトマック川流域州際委員会から親善大使が派遣され、ポトマック川での活動を紹介してくださいました。今後の交流が楽しみです。

(文責：特定非営利活動法人あらかわ学会)

発行物

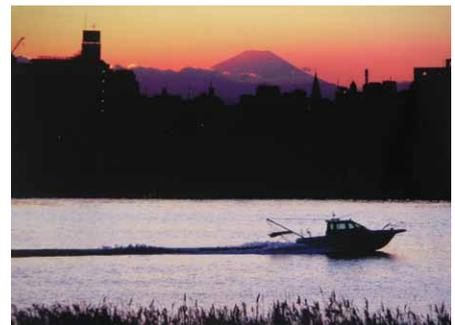
- 荒川の舟運
- まわってめぐってのしい荒川
- ポストカード「富士の見える荒川」
- ブックレット「荒川両岸まち歩き」シリーズ全4巻
- 荒川下流域における環境と防災に関する意識調査
- 荒川洪水から100年 明治四三年の記録
- 年次大会論文集(1996~2011年)
- 荒川将来像計画2010への意見書
- 伝統漁法再現ビデオ「建干漁」「笹伏漁」
- CD「鳴く虫の世界」
- 小冊子「荒川堤の桜」



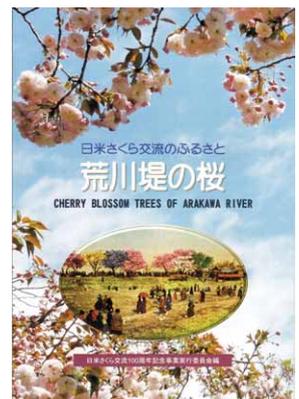
日米さくら交流 100周年記念シンポジウム(平成23年12月)
主催：日米さくら交流 100周年記念事業実行委員会



インターネットでつないで行った
荒川・ポトマック川姉妹河川提携調印式



関東の富士見百景選定記念
ポストカード「富士の見える荒川」より



小冊子「荒川堤の桜」
東京農業大学出版会

NPO法人エコロジー夢企画

環境問題やまちづくりを実践している市民団体の、視野の広さや枠にとらわれない活動の新鮮さは今まさに時代が求めているものです。さまざまな市民団体に所属して環境活動をしてきた人々の知識と技能を集結して、環境問題解決への提案活動を行い、受託事業などを展開しながら、少しでもよい先事例を作っていく、行政との協働のあり方を形作っていくNPO法人を設立したいと考えました。そして私たちの後に続く世代に、エコロジーへの夢を実現するキーをバトンタッチしていきたいと思っています。

私たち「NPO法人エコロジー夢企画」が展開している活動をご紹介します。



足立区桑袋ビオトープ公園調査



足立区桑袋ビオトープ公園で「昆虫観察会」



大曽根ビオトープ「採集した中でいちばん好きな魚を描こう！」

前身の任意団体「せせらぎグループ」は、平成7(1995)年に埼玉県八潮市にあった「大曽根湿地」を発見しました。

日本全国水質ランキングで、昭和55(1980)年以降15年連続水質ワースト1位だった綾瀬川下流の浄化対策として、平成7(1995)年、関係7団体からの要望を取りまとめて国やルネッサンス21協議会等に対しビオトープの創出・保全を提案しました。

その提案内容は行政側の理解を得られ、平成10(1998)年に湿地の買い取りが成功。同年、国の「地域戦略プラン」に足立区と八潮市が応募して、ビオトープの創出・保全の予算を確保しました。しかし紆余曲折があり、発見から右岸足立区側の「桑袋ビオトープ公園」が平成17(2005)年に完成するまでに7年、左岸側の「大曽根ビオトープ」が平成19(2007)年に完成するまでに12年を要しました。

任意団体「せせらぎグループ」は平成15(2003)年に「エコロジー夢企画」として、新しいメンバーを加えてNPO法人化しました。両ビオトープ工事予定箇所の工事前の生物生息環境を調査・記録し、ホームページ「足立区環境デジタルマップ」で紹介する活動を行いました。平成21(2009)年には、同じ地点で生物生息環境調査を行って、ビオトープの効果を調べると共に、ガイドブックを製作し、地域の小・中学校に配布しました。

平成18年(2006)から毎年2回行っている「エコゆめ探検隊」と題した生物調査活動では、平成24(2012)年までで、延340名の親子が参加し、綾瀬川の歴史やビオトープの保全や創出による生



綾瀬川

物生息環境の変化を学んでいます。しかし、近年では土砂の堆積による水質の悪化や福島第一原発事故の影響による放射能汚染も課題となっています。平成 21 (2009) 年からは、「文化のあるところでは環境が守られ、環境が豊かなところでは文化が育つ」を合言葉に「エコ夢探検隊お月見コンサート」と題した文化活動も行っています。

これらの活動から平成 21 (2009) 年に開催された「World City Water Forum (韓国仁川にて開催)」に招待される機会を得て、私たちの活動を紹介してきました。

さらに私たちの団体では、河川から市街地にも視野を広げて、まちづくりに関わる活動も展開しています。平成 16 (2004) 年には、足立区の公園や水辺などの身近な住環境を調べ、世界共通のアイコン(絵文字)で表した地図「あだちグリーンマップ」を作製しました。

自分達が住んでいる地域の川・緑地の位置を航空写真から一目で分かるようにして、区民が地域の自然環境に興味を持ってもらえるように工夫したもので、足立区の小・中学校に配布し、総合学習に活用してもらいました。この「あだちグリーンマップ」は NPO 法人グリーンマップジャパンのホームページでも紹介されています。

生物を守る取り組みとしては、毎年、「プールのヤゴ救出大作戦！」と題した運動も行っています。屋外プールでは、プール開きに際して毎年 6 月ごろに清掃が行われますが、せっかく地域のたまり水(プール)の中に産み付けられたトンボの幼虫(ヤゴ)も下水に流されてしまうので、水抜きがはじまる直前に、親子でトンボの幼虫(ヤゴ)を救い出して、自宅で育て、羽化後に自然に帰す活動です。

平成 16 (2004) 年～平成 24 (2012) 年の間に開催した計 15 回の「プールのヤゴ救出大作戦！」に、延 4,410 名の親子が参加しています。

その他、「教師のための水に関する教育法-プロジェクト WET-」、「生ごみの堆肥化提案」、「太陽エネルギーを使いこなそう！」といった人材育成や環境に優しい社会への提案活動も展開しています。

「生ごみの堆肥化提案」では、足立区の農業を活性化するため、また資源を有効活用するため、学校給食残渣の堆肥化提案、飲食店の生ごみや運動場の芝の堆肥化実験も実施してきました。この手法で河川敷の外來種や樹木の堆肥化も出来ることを河川事務所などに提案しています。

この他、平成 21 (2009) 年に、再生可能エネルギーを普及啓発するために創設した「ぐるっ都地球温暖化対策地域協議会」の事務局運営を担っています。平成 23 (2011) 年 3 月 11 日の東日本大震災以後、「つながり・ぬくもりプロジェクト～自然エネルギーで被災地支援～」を 26 団体と共に立ち上げ、その幹事団体として「太陽熱温水器」の寄贈・設置を行ってきました。川や井戸の水でも太陽の熱でお湯になり、緊急時の被災者支援に役立ちました。その後、宮城県・岩手県などの避難所や仮設住宅、農家に合計 171 基の「太陽熱温水器」を寄贈し、現地雇用で設置を進めています。

(文責：NPO 法人エコロジー夢企画)



「エコ夢探検隊お月見コンサート」



あだちグリーンマップ



足立区東綾瀬公園プール 会場



太陽熱温水器で被災地支援

CASE
4

石神井川 Shakuji River

(東京都)

川と水辺を楽しむプロジェクト

石神井川は全長 25.1km の 1 級河川で、人口 72 万人の練馬区を西から東に流れています。昭和 30 年代には生活廃水が流れ込んでいて、東京一汚い川と言われました。下水道整備が実施される傍ら、鋼矢板を打ち込み、コンクリート壁で固める応急工事でした（第 1 次改修）。その後、水質は改善されました。

目下、石神井川では“50mm/h 対応（1 時間 50mm の雨量に対応できる）の川づくり”が下流の隅田川との合流地点から施工されて来ました。平成 14（2002）年当時は、練馬区の東半分の河川拡幅（第 2 次改修）と、河床掘削（第 3 次改修）が終了した状況でした。

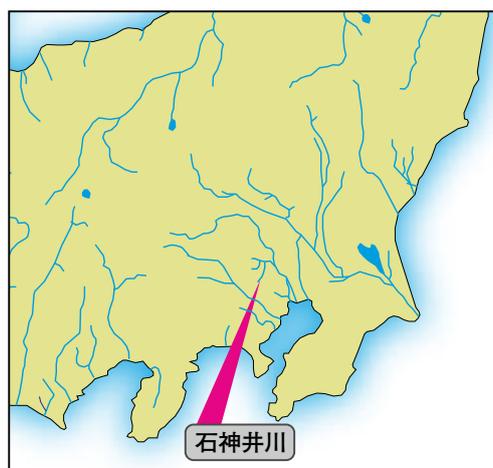
この年に私は練馬区へ転居してきました。折しも練馬区の「区民がつくり、共有し、自ら実行する—練馬区民環境行動方針検討会議」の設置を知り、検討会議への参加に応募。そのとき、自然環境の把握を目的とした練馬のまち歩きをしました。

当時、練馬は東京 23 区内では最も緑被率が高かった（27%）のですが宅地化が急速に進んでいました。

上記の検討会議でまとめた提言の 1 つが「川と水辺を楽しむプロジェクト—子どもたちを川や水辺に誘い出すこと」でした。検討会議は平成 16（2004 年）に解散し、直後に活動団体「川と水辺を楽しむプロジェクト」を立ち上げて行動を開始しました。

ところが練馬区役所との折衝が難航し、折衝に折衝を重ねて、平成 17（2005）年 8 月に練馬区教育委員会委託事業として“子どもたちの川遊び”が実現出来ました。以後、毎年自然体験イベントを開催しています。平成 24（2012）年までの延参加者は 2,200 人超です。

翌平成 18（2006）年、石神井川を管轄する東京都第四建設事務所主催の「石神井川流域連絡会」に応募しました。この石神井川流連に参画したことが河川関係者とのつながりをつくり、いろいろな勉強する機会となって、大いに活きています。



改修以前の南田中緩傾斜護岸
(平成 21 (2009) 年頃)



親子で一緒に楽しむ川遊び

1. 既設の4つの石段部を活かして川を蛇行+脱コン河床

河川改修には長い時間と多額な費用がかかります。平成9(2007)年に国の河川法大改正が行なわれ“治水・利水の川づくり”を転換し、親水化はむろんのこと、生態系に配慮した川づくり、まちづくりの一貫として道が拓かれたのです。

折しも長光寺橋以西～南田中緩傾斜護岸区域の河床掘削の大工事（最終の第3次改修）が行なわれることになりました。河床を2m以上も掘下げるのです。“出番だ！”と感じました。

南田中緩傾斜護岸は練馬区自慢の親水空間です。緩やかな石段が4ヶ所あり、幼児でも水際に降りられます（但し、鋼鉄製の柵あり）。竣工は平成6（1994）年にされた箇所、平成9（1997）年に区役所主催で行なわれた唯一の“川遊び”の記録がある所です。

また、下流の完成済の環状8号線道路の長光寺橋では高さ5m余のコンクリート絶壁です。河床もコンクリートで固められ、河道の中央部だけに50cm幅ぐらいで石が敷かれています。生物の生育環境としては厳しい状況でした。

「川と水辺を楽しむプロジェクト」の強みは、自身が川に降り水面視線で風景を捉えられることです。即行動に移す機動力も持ち味です。早速、第四建設事務所に対して「南田中緩傾斜護岸区域」の工事において、「①河床をコンクリート化しない、②水辺への4つの石段部をそのまま活かし川を蛇行させる、③生態系に配慮した川づくりを行なう」の3項目を提案し、懇談を重ねました。“立場は異なるが皆さんも川が大好きでしょう。貴方方の心に合う川づくりましょう”という気持ちでした。

平成21（2009）年9月、結果として私たちの提案が実現しました。河床はところどころ4m以上も掘下げ「巨石張工+石材つき布団籠敷き」施工が行なわれ、脱コンクリートが実現されました。工事以前より河道内に設置されていた水辺に通ずる4つの石段部（掘下げると裾野は予想以上に大きい）はそのままに、現在も河道の蛇行に役立っています。また、川面や水深が確保されました。（次の年には大雨の増水で土砂が堆積し、深みは無くなりました。）

川原の緑がつながり、生態系にも少しずつ優しくなっています。新たな瀬が生まれています。河川流量の確保が今後の課題です。



南田中緩傾斜護岸（平成24（2012）年）



旧タイプの改修済みの河道
（長命寺橋下流）



増水等で自然にできたせせらぎ
（平成24（2012）年）



河床を掘り下げて大きな自然石を敷き込む

2. 公園と川のドッキングで“川公園構想”の誕生

近い将来の事業計画となりますが、石神井川沿いの老朽化した都営団地の建て替えに合わせて5,600m²の公園用地を生み出し、川とドッキングさせる“川公園構想”が東京都の川づくり懇談会の中でまとまりました。そして今、原案は企画者（東京都建設局河川部計画課）から実施者である東京都第四建設事務所に引き継がれました。実現は10～15年後になりますが、この画期的な計画に参画した一人として今後もフォローアップして行きたいと思えます。

平成9（1997）年、国の河川法大改正により河川の大幅改修に先立って行政は地元の大まかな合意を得ることになりました。そうした流れの中で東京都では多分初めてつくられた懇談会である『上石神井アパート付近の川づくり懇談会』に参画しました。懇談会は平成20（2008）年1月～平成21（2009）年3月の期間で6回開かれました。主催（事務局）は東京都建設局河川部計画課です。

今回の対象区間は「関町東・本立寺橋～扇橋」間の約4kmです（上流部にあたる蛸橋～扇橋の下流区間は平成25（2013）年1月現在、工事実施中）。現在8mの川幅を20mに、12m幅を40mに拡幅する、用地買収を含めての大改修計画です。

メンバーは学識経験者（大学工学部教授）を座長に、地元市民（都営住宅居住者代表も含む）、公募及び東京都の推薦者、地元行政関係者など15人です。東京都都市整備局がオブザーバーで参加していました。私は「石神井川の中でもっとも遊んでいる」という理由から、第四建設事務所の推薦で参画しました。

対象区間は石神井川を挟んで点在する老朽化した都営アパートの建て替えとの絡み、建て替えアパート用地が桜の名所と知られている場所だけにその移設問題が当初の焦点でした。メンバーには私みたいに「川は遊び場」と言う者は他にいませんでした。

このメンバー間の川に関する捉え方のギャップを埋める必要がありました。私の言い分の幾つかを紹介します。例えば、「全幅20mの川の両側に管理用道路は不要だ」、「遊歩道も片側だけでもいい」、「遊歩道は出来るだけ水辺に近くつくって欲しい」、「水辺に下りる階段を多く設置して欲しい」、「川に飛び石を置いて涉れるようにして欲しい」—いずれも川を遊びの場、学びの場、潤いの場、憩いの場にすることが目的です。

極めつけの主張は「護岸をシンメトリー（対象形）にするなかれ！」でした。西から東に流れる石神井川です。たかが20m幅の川です。右岸（上流から見て右側）はいつも日陰です。左岸はいつも日向です。右岸に角度をつけ、左岸は出来るだけ緩やかな傾斜にする—それだけで遊び場所が広がります。生き物に優しい。川遊び体験者なら至極当然に思うことです。しかし、土木工学専門の先生方には唐突に聞こえたご様子でした。即席で下手なイラストを提示しながら意を伝えようとしました。

6回の懇談会では活発な意見交換が行われました。また、主催者は意欲的でしたが、既成案を押し付けるようなことはありませんでした。発言を真摯に受け止めている印象を受けました。

そして平成21（2009）年初め、事務局から具体的なプラン3案が、分かりやすくイラスト化して提示されました。



川の両側に点在する老朽化した都営アパート



A 案



B 案



C 案

懇談会で東京都が提案した3つの検討案

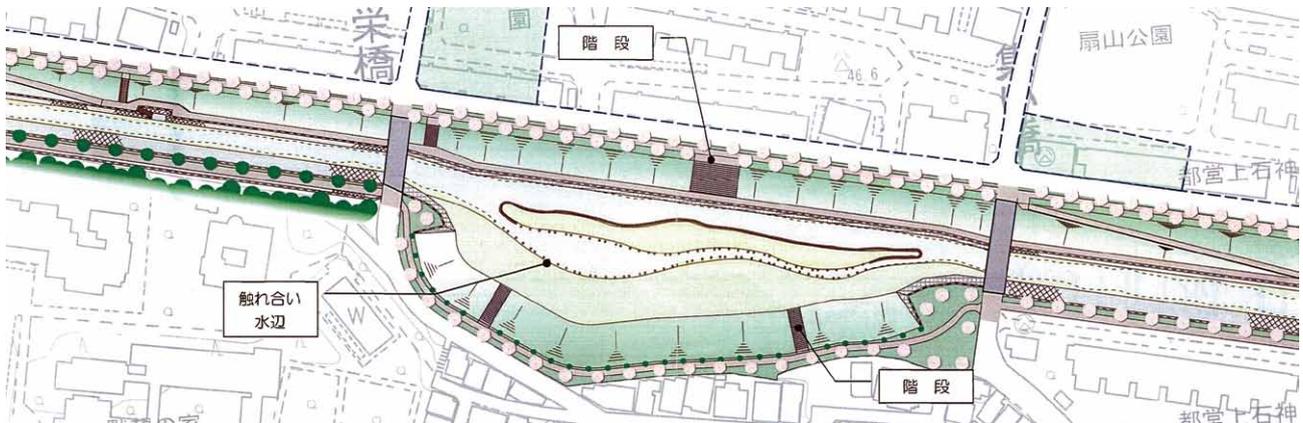
< A 案 > 多様な生物と水辺に親しみ、利用できる空間

< B 案 > 日当たりの良い斜面でくつろぐ思いのオープンスペース

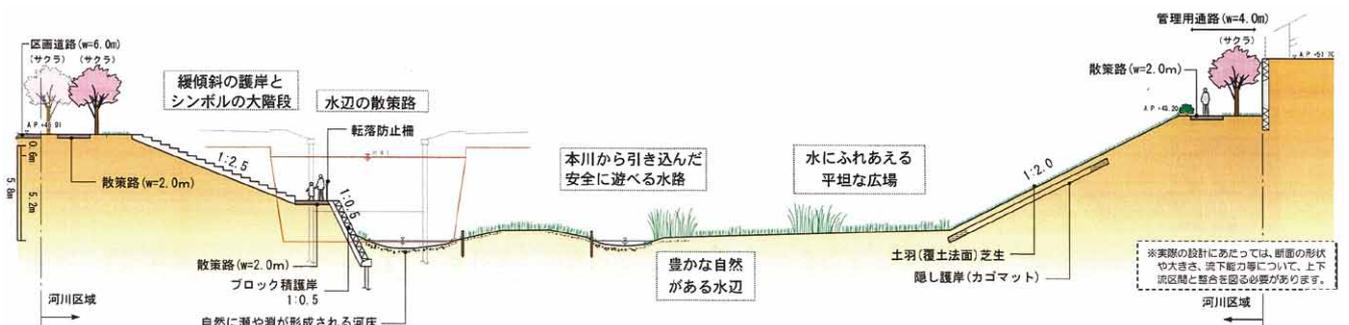
< C 案 > 公園広場と親水空間の複合的空間

懇談会で一番人気があったのが< A 案 >でした。私はこれを“川公園構想”と名付けて評価しました。私の意見が相当反映されていたこともあります。

ただ、気になった点がありました。この“川公園”の維持管理は容易ではないな、ということです。この雰囲気を保つには「維持管理を人任せにしないこと」、「地元のみんなが協力し合うこと」でこそ素敵な空間を維持できる、そう思いました。



A 案：多様な生物と水辺に親しみ、利用できる空間（平面図）



川と公園をドッキング 中の島を作り、遊び・学び・潤いの場に

3. 川原ビオトープづくり・再生

三面張りの印象が強い都市河川ですが、中流から上流には例外もあります。石神井川には改修後の南田中緩傾斜護岸区域以外にも存在しています。そうした場所で川原ビオトープ（草や木が繁り、石が転がる砂州や、中州を利用した空間）づくりを思い立ったのは平成 19（2007）年のことです。

注目の候補地が南田中の 1km 上流の流れを挟んで両岸に 2～3m の川原がある「茜歩道橋下流域」です（第 2 次改修で拡幅済）。この一画だけが両岸ともに 5m ほど幅広く、その区間は 30m ほどあります。立派な親水階段が設置済です。河川管理者には、生態系に優しい管理として、毎年の除草時は半分ずつの施工をお願いしています。時に自生の柳が 3m ほどにもなります。

春先に思いを実行しました。気持ちだけは若い初老 3 人組の挑戦です。ツルハシ、スコップで川につながる深さ 60cm、長さ 5m の溝掘り、穴掘り等を行ないました。コンクリート片の埋没もあり、難儀な作業でした。

そして夏。子どもたちを動員して深さ 50cm、直径 3m の穴と、1m の穴 2 つを掘りました。川を渡って対岸の草を刈って寝かせ、休み処に。川べりからカルガモのための遊歩道も作りました。護



ビオトープづくり作業風景

岸のコンクリート壁からの湧水を発見。これを利用しようと深さ 40cm、長さ 3m の溝を掘って川に繋げました。もちろん東京都第四建設事務所、練馬区土木管理課には事前の了解、届け出済の作業です。

「川原に溝を掘り、穴を掘っても大雨 1 回で土砂に流される。無駄だよ…」との



手作りの「茜歩道橋下流域ビオトープ」

声も聞こえて来ました。これに対して私たちは「おっしゃるとおりです。でも 2 回目の掘削は至極簡単に再現出来ます。やり直せばいいじゃないですか。自然共生とは、ある意味ではそんなものです」と、応えています。

翌平成 20（2008）年 7 月、自然観察仲間から「すごい、すごいよ！」と言って『茜歩道橋 カルガモ家族ものがたり』と題する写真を頂きました。1 年前、子どもたちと一緒に掘った溝や穴がカルガモ誕生に役立っていたのです（恥ずかしながら、他のことに



水位が下がり、破棄された茜歩道橋下流域
（平成 23（2011）年秋）

かまけて仲間に教えて頂くまで気が付きませんでした)。高さ4mの絶壁が犬猫などからカモたちを護っていただいたのです。

しかし、平成21(2009)年12月～翌1月にかけてこのホームランドは悪夢に見舞われました。100mほど下流の橋改修で堰止めされていた流れが、工事完成で鋼矢板が取り外された…。そして強い引き水が生じて河床が大きく削られたことが原因か、一挙に水面が1mも下がってしまったのです。溝も完全に干上がってしまいました。…嗚呼！

皮肉なもので平成23(2011)年4月に日本テレビから「川のエコ活動」として取材申込みがありました。“川が壊れた”とお断りしました。しかし2週間後、再度ご依頼があり受諾しました。5月23日に取材がありました—出演者が川を掘り、流れを変え、中州をつくり、とがんばる内容でした。

川を渡って草むらで話している本番中、足元から80cmあたりで突如、バタバタとカルガモが飛び立ちました。抱卵していたのです(卵が5個ありました)。出演者の方は巢に手を当てて「ほっかほか…！」と感動の様子でした。実はロケハンの時も全く同様なことがありました。石神井川が自然豊かである証拠です！

この内容が6月上旬の2週に渡って全国放映されました。放映後30分もしない内に鹿児島と新潟の知人から電話が入りました。テレビの伝播力の何たる強さ！

その後、体調を崩し、第四建設事務所と疎遠になった等で目立った活動は出来ていません。しかし、川づくりに対する熱意は冷めたわけでは決してありません。平成24(2012)年秋、久しぶりに第四建設事務所と懇談を持ちました。この席で「重機を使わず人手でやるだけなら川中の石積みもOK」と再度了解を得ました。

春が楽しみです。



写真：「茜歩道橋カルガモ家族ものがたり」



テレビ取材を受ける



茜歩道橋下流域ビオトープで川に親しむ

(文責：川と水辺を楽しむプロジェクト 佐藤英雄)

CASE
5

山崎川

Yamazaki River

(愛知県・名古屋市)

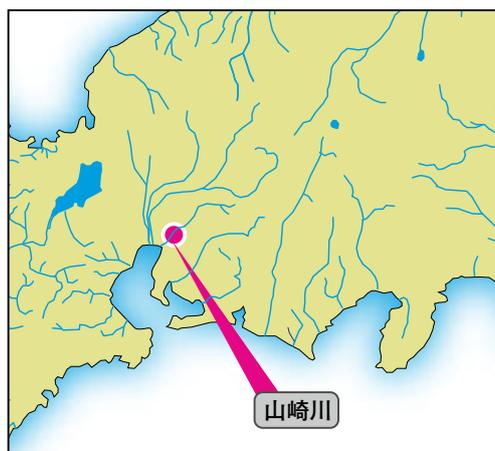
“外来種の駆除”名古屋市山崎川の場合

山崎川は、名古屋市千種区にある猫ヶ洞池を源流とし、名古屋港に流れ込む川です。「日本のさくら名所百選」に選ばれており、春になると遠くからも多くの人を訪れます。住民にとっては、小さいながらも「わたしたちの川」として自慢できる愛すべき川で、山崎川グリーンマップの他、山崎川の各種愛護会、山崎川鳥撮会など、この川をフィールドとして活動している団体が多くあります。

この川は、護岸工事がしっかりと施工され、川の堤防ぎりぎりまで民家が建ち並ぶ典型的な都市河川です。第二次世界大戦後に急速に都市化が進み、まわりの住宅の家庭排水は直接川に流され、昭和40年代から50年代にかけては、川面は洗剤の泡だらけで、臭いがして近寄りたくないという状態でした。

山崎川に対する人の関心をなんとか取り戻そうと、昭和57(1982)年に始まったのが、魚の放流会です。毎年1回、平成13年まで続きました。このとき放したのが、おもに中国原産のコイでした。日本人にとって「清流にコイ」というイメージは壊しがたいものがありますが、このコイたちが後に数を増やし、大型化して少々困った存在になってきました。

それに加えて、一時ペットにするのがブームであったミドリガメ(ミシシippアカミミガメ)。大きくなると体長が30cmほどにもなり、家で飼えなくなると簡単に川に捨てられました。大きなコイとミシシipp



山崎川鳥撮会



山崎川に棲むコイ



山崎川に棲む外来種(ミシシippアカミミガメ)

アカミミガメは、橋の上からでもよく目に入り、近所の人たちがかわいがって毎朝エサを与えるという風景があちこちで見られていました。しかし、その陰で、山崎川本来の生態系が次第に破壊されるという深刻な状況が進んでいたのです。

山崎川グリーンマップでは、平成 19 (2007) 年に子どもたちと川周辺の外来種調査を行いました。その時初めて、外来種がごく普通に生活範囲内に蔓延していること、今まで見られていたニホンイシガメが姿を消し、いつのまにかミシシippアカミミガメだらけになっていることに気づいたのです。早急に、なんらかの手を打たないと取り返しがつかないことになる。そう思いながらも、地域の人がかわいがっているコイやカメに手を出すことには、相当の決断力と準備が必要でした。



罟を仕掛けてカメを捕獲

平成 20 (2008) 年夏、日本の淡水生、陸生のカメの自然誌、博物誌に関わる人たちのための情報ネットワークである日本カメ自然誌研究会の協力を得て、初めてカメの捕獲調査を行いました。

捕獲したカメ 28 匹のうち、ミシシippアカミミガメが 15 匹、クサガメ 9 匹、スッポン 3 匹、そしてイシガメが 1 匹でした。イシガメは、まだこの川にいたのです。そして、ミシシippアカミミガメは日本カメ自然誌研究会に引き取っていただきました。



捕獲したカメの学習会

始めた頃は、カメを駆除することに対する地域住民の反発が大きかったのですが、その流れを大きく変えたのは、山崎川グリーンマップが主催した子どもたちによる昔の山崎川の聞き取り調査と名古屋で開催された生物多様性条約第 10 回締約国会議(通称 CBD/COP10) でした。生物多様性条約の大きな目的には、当然ながら生物多様性の保全ということが掲げられています。今までは、ただ生き物がいればいいと、とらえられていましたが、その地方本来の生き物を守っていくということが重要だということがクローズアップされました。その結果、外来種が本来の生態系や在来種の存在を危うくしているということに人々が気づき始めました。

また、山崎川の聞き取り調査では子どもたちが近所のお年寄りから、昔、川で遊んだ様子を聞き取りました。昔は、川で獲った魚を食べていたこと、現在日本国の天然記念物に指定されているイタセンパラがたくさんいたこと、ホテルがたくさんいて、窓から家の中に入ってくるほどだったということなどなど、子どもに話すうちに、外来種の駆除に反対する



子ども達による昔の山崎川調査

お年寄りたちの気持ちが変わっていきました。次世代に、山崎川本来の生態系を残してあげたいと思うようになってくれたのです。

今は、山崎川の外来種の駆除を、大手を振るってできるようになりました。今年は91匹捕獲したカメのうち、イシガメが12匹、ミシシippアカミミガメが36匹でした。回を重ねるごとに、外来種のカメの割合が減り、イシガメの確認数が増えているのが嬉しいです。ただし、5年間で捕獲したイシガメ二十数匹のうち雄は1匹のみです。カメの雌雄は、卵が孵化するときの地中の温度で決まるといいます。コンクリートで固められた護岸はどうしても温度が上がってしまいます。今後、自然に近づけた護岸の工法も必要となってくるでしょう。

コイについては、これからの課題です。川べりを散歩している人たちから、

「コイは大きな口をあけて、まわりのものすべてを飲みつくしてしまう」

「昔からこの川に棲んでいる小さな魚たちが減ったのは、コイが食べてしまうからだろう。」

「山崎川では、他の地域で問題になっている外来種のザリガニですらコイに食べられてめったに見られなくなった」

という声が届いています。

一方で、毎日のようにパンなどのエサやりに訪れる人がいます。現時点では、様子を静観しているのみというのが現状ですが、在来種保護のためにコイをこれ以上増やさないようにしたいと思います。

山崎川グリーンマップでは、平成20(2008)年より毎年夏休みに1～2回、地元小中学生対象の生き物観察会を行っています。山崎川に棲むミシシippアカミミガメなどの外来種駆除の理解を得ることも観察会開催の大きな目的の一つです。前日に調査用定置網、カメ毘などを仕掛け大規模に行っています。平成20(2008)年より日本カメ自然誌研究会、現在はなごや生物多様性センターの協力もいただきながら開催しています。



山崎川グリーンマップが毎年夏休みに開催している生き物観察会

える形で子どもたちに伝えてくれました。

参加者の募集は、近隣図書館、児童館などでチラシを配布しました。ただし、数年、同じ時期に続けて開催しているので、川の生きものに関心のある子どもたちは、心待ちにしており、すぐに満席になる盛況ぶりです。

5月～10月には、月に1、2回のペースで、少人

昨年、講師としてアウトドアタレントをお迎えしました。「要注意外来生物のミシシippアカミミガメの他、特に特定外来生物に関しては、駆除(殺処分)の必要があること。それらの生き物には罪がなく、人間が勝手に住処を変えてしまったことが悪い。在来種を守るために、誰かが殺処分といういやな役目を担う必要があるということ」を、わかりやすく、感情に訴



桜咲く山崎川に集まる人々

数を対象にした川の生きもの調査を行っています。このとき参加するのは、地元のボーイスカウトであったり、川で知り合った子どもであったりと、あくまでも有志によるものです。

地元汐路小学校4年生の環境教育の担当をした実績もあります。4年生全員、約100名が参加しました。この場所は特定外来魚のカダヤシが非常に多く、たくさん採れました。子どもたちが持参した水槽を持ち帰るとき、ほとんどすべての水槽にカダヤシが入っていたのには驚きました。

「特定外来生物を移動させると、罰金だよ！」

と伝え、水槽から必死で取り除きました。

カダヤシはかわいそうに殺処分となるわけですが、子どもたちには、その事実を隠さず伝えました。飼えなくなったペットを簡単に川に捨てたり、生き物の棲み場所を変えたりすることが、生態系にとって深刻な事態をもたらすということを伝えるために、こういったことを伝えることは必要だと考えています。



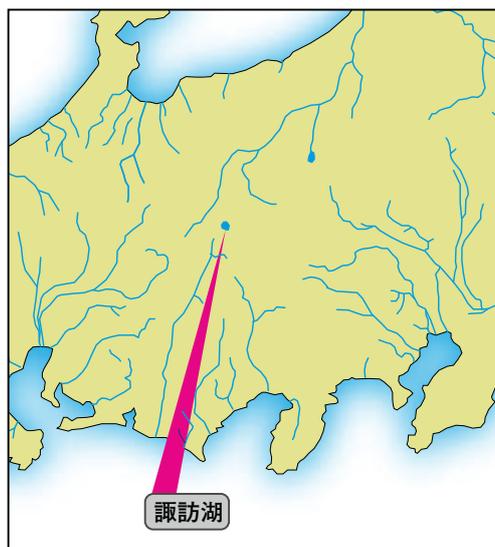
子どもたちの水辺の活動の様子

(文責：山崎川グリーンマップ 大矢美紀)

よみがえれ諏訪湖 —住民の思いを力に変えて—

長野県のほぼ中央に位置する諏訪湖は、そこに暮らす人々の生活を支え、同時に富嶽三十六景にも描かれる山紫水明の湖、諏訪大社の信仰と自然現象が調和した神秘的な湖として、かけがえのない存在でありました。

しかし、昭和30年代に水質汚染が進み、夏場にはアオコが盛り上がり、透明度はマイナスと言われる程になりました。そして、度重なる豪雨災害を経て採用された治水対策が「コンクリート波返し工」で、コンクリート護岸に囲まれた湖岸には浮遊ゴミも打ち上げられず、湖面はアオコとゴミに覆われました。その様な状況を打開するため、行政は昭和40年代から浚渫事業や下水道事業に着手し、様々な対策を講じてきましたが、昭和61(1986)年10月には、ついに湖沼水質保全特別措置法の指定湖沼となり、私たちの宝であったはずの諏訪湖は、死に瀕していたのです。



諏訪湖



コンクリート護岸と浮遊ゴミの様子

私たちの活動が始まったのは、そんな深刻な状況が続いていた昭和55(1980)年のことです。下諏訪青年会議所(現諏訪圏青年会議所)が行った「トンボ調査」等がきっかけとなり、「このままではいけない。自分たちにも何かできることがあるはずだ」、そんな思いをもった住民たちが動き始めました。こうして下諏訪町内の7団体を中心となって町中に声をかけ、諏訪地域で最初に組織的な活動を始めた「下諏訪町諏訪湖浄化推進連絡協議会」が誕生したのです。

活動の当初から掲げているキャッチフレーズは「よみがえれ諏訪湖」、「諏訪湖にトンボを」です。具体的にトンボを守る活動をしてはませんが、発足のきっかけとなった調査で、ヤゴが護岸から上がれない現状を知り、トンボが飛び交えるような環境になって欲しいという願いが込められています。

活動の当初から掲げているキャッチフレーズは「よみがえれ諏訪湖」、「諏訪湖にトンボを」です。



透明度調査の様子 一面をアオコが覆っている

る長野県、科学的な分析や水質調査は、信州大学や県の関係部署が対応してくれていましたので、我々は目の前に広がるゴミの山を、志を同じくして集まった多くの「人の力」で立ち向かおうとしたのです。当時の状況がひどかったとはいえ、毎月1回という回数をこなすのは容易なことではありません。また、これだけの回数をこなしても目に見えた変化が現れません。そんな、先の見えない活動を続けていくためには、どうすれば良いのでしょうか。

それは、1人、1人が無理をしないことです。互いを支えあうことです。下諏訪町には行政区が10区あります。諏訪湖に接する区もあれば、接しない区もありますが、それぞれの区が受け持つ月を決め、個々の負担は少なくとも、全体としては弛まずに清掃が行われているという仕組みを作りました。個々の力などは知れたものです。しかし、2万人で取り組めば大変な力が発揮されるのです。

この活動は既に30年以上続いています。そして諏訪湖の環境は劇的に改善しました。これは下水道整備などの

公共事業による成果が大きいのですが、下諏訪町のみならず、湖周で暮らす人々が活動を始めるきっかけとなり、諏訪湖に対する思いを高めた、我々の活動にも大きな意味はあったと思います。

そして、改善されてきたのは水質だけではなく、水辺の風景も大きく姿を変えてきたのです。コンクリート護岸で覆われていた諏訪湖は、長野県の策定した「諏訪湖の水辺整備マスタープラン」に基づき、8つのゾーンに分けて再整備されました。人工なぎさに生まれ変わった湖岸は親水性が高まり、これまで近寄ることができなかった水辺に、再び人が集まるようになったのです。周辺に整備されたジョギングロードを走るランナー、富士山や八ヶ岳をバックに写真を撮る家族、漕艇場で練習する高校生。多くの人々が諏訪湖を楽しめるようになりました。この地域で暮らす人々の、諏訪湖との係わりも、徐々に元の姿に戻ってきたのです。

諏訪湖は蘇りつつあります。しかし、これで満足してはいけません。「もうこのあたりで良いだろう」と歩みを止めてしまえば、また元の姿に戻ってしまうかもしれません。壊してしまうのは簡単でした。しかし、ここまで復活させるのに30年以上の時間と多額な費用、そして多くの人の情熱と努力が必要でした。二度と再び汚さないためには、湖岸清掃が当たり前のように行われている、この姿を示し続けていくことが必要です。「ゴミを拾う人は、ゴミを捨てない」。活動そのものを啓発活動として、これからもこの地道な活動を続けていきたいと考えています。

(文責：下諏訪町諏訪湖浄化推進連絡協議会 総合研究部会)

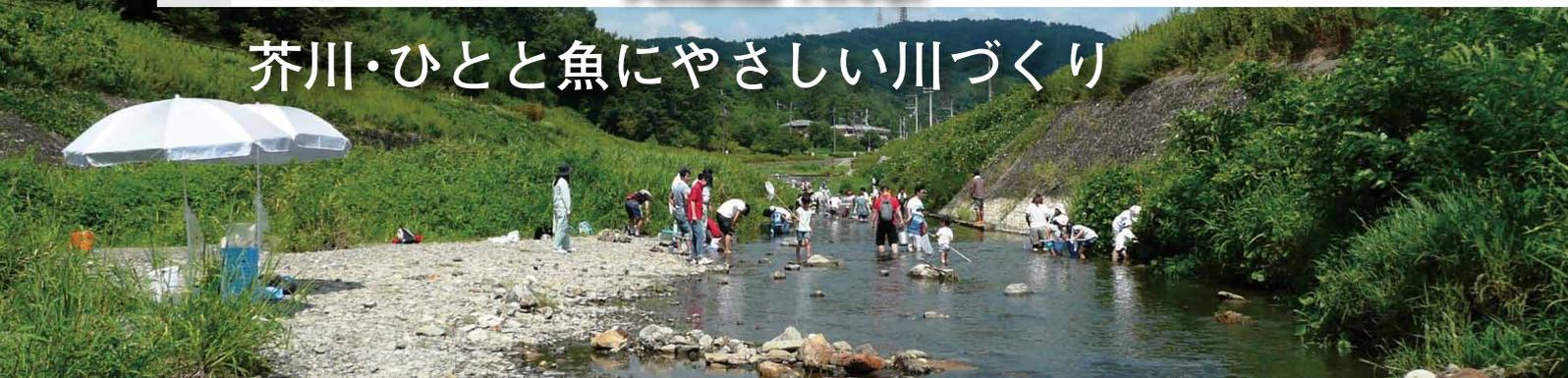


湖岸清掃の様子



人工なぎさの整備

芥川・ひとと魚にやさしい川づくり



高槻市は、大阪平野の北東にあって、京都と大阪の中間に位置しています。芥川は、高槻市を北から南に縦断し淀川に注ぐ1級河川で、途中には摂津峡として知られるV字渓谷もあります。自然環境を残す貴重な場所として昔から市民に親しまれて来ましたが、高度経済成長期には人口急増の影響を受けて水質が悪化し、市民からは遠い存在になっていました。その後、下水道の普及等により徐々に水質は改善し、近年はホテルが中流域まで戻るなど自然回復が見られるようになりました。さらに、親水空間の整備なども行われた結果、水辺で憩う人が増えてきました。

同じころ、全国的にも環境に対する関心が高まり、治水・利水に加え、河川環境の整備と保全が河川法の目的に追加されました。



摂津峡



大阪平野を流れる昔の芥川

そんな中、より豊かな生態系の回復と生き物との触れ合いを通じた「市民の心の豊かさ」の回復を目指して、平成17(2005)年7月7日(川の日)に、市民団体が集い「芥川・ひとと魚にやさしい川づくりネットワーク～愛称：芥川倶楽部～」を設立し、活動を始めたのです。

平成18(2006)年には、芥川倶楽部をはじめとする市民と大阪府、高槻市が、学識経験者の助言を受けて川づくりの基本的な指針となる「芥川創生基本構想」を策定。「多くの命を支える川」、

「清らかな水が流れる川と安全な暮らし」、「楽しみ憩う」という3つの目標を掲げて活動を行っています。

代表的な取組としては、活動のシンボルであるアユを遡上させるための「魚みち」の整備があります。「芥川の下流の堰まで遡上しているアユを何とか上流へ



芥川倶楽部シンボルマーク



土のうの魚みちづくり

調査観察会の様子

遡上させたい」と、河川管理者の国と府に魚道の設置要望を行う一方、自分たちで土のうの「魚みち」を作ることにしたのです。試行錯誤しながら、川の中の堆積土を使った土のうを、人力で積み上げること2,500個。完成した後も、増水で流された土のうを拾って積み直すという苦労もありましたが、見事にアユが遡上しました。これを踏まえ、芥川の「魚みち」設置計画をまとめ、河川管理者の国・府へ提案したところ、国や府も魚道の設置を前向きに検討し、先ずは府が中流域に3つの魚道を設置し、続いて平成23(2011)年3月には、最下流に位置し、約2mの落差がある芥川大橋上流の堰に、国により引き込み式の魚道が完成しました。

そして、なんとその年の6月に、中流域で多くの天然アユが見られるようになったのです。11月に行ったアユの卵の観察会では、たくさんの卵も確認することができました。現在は、残りの堰への魚道の設置や堆積する土砂の除去など魚道の維持管理に、国・府と連携しながら取り組んでいます。

そのほかの取組としては、特定外来生物「ミズヒマワリ」の駆除活動、堤外地のスポーツ広場を自然エリアに戻す「津之江公園自然再生計画」への参画、市民による河川の一斉清掃、講座や観察会など、年間約30回のイベントを行っています。

芥川での活動は、市民団体からなるネットワークが中心ですが、河川管理者である国や大阪府、そして高槻市と良好な関係を築き、協働して取り組んでいることが大きな特徴です。これまでに、日本河川協会の河川功労者表彰や、大阪府まちづくり功労者賞等により取組を評価していただきました。今後は、この連携の輪をさらに多くの人に広げるとともに、他の地域で活動している団体とも交流を深め、川を中心としたまちづくりを続けていきたいと考えています。



芥川クリーンアップ(清掃活動)



お父さんのための魚とり講座



ミズヒマワリ駆除

(文責：芥川・ひとと魚にやさしい川づくりネットワーク)

遠賀川 Onga River

(福岡県)

遠賀川式川づくり直方

私たちの住む遠賀川は北部九州にあり、嘉麻市の馬見山から響灘に注ぐ流路延長61kmの一級河川です。特徴は流域人口密度が高いこと（九州の一級河川ではNo.1）。石炭産業100年の歴史を体験し近代日本のエネルギーを支えたこと。そして、サケがのぼる南限の川とも言われています。とにかく、太古の昔から大活躍してきた川なのです。

ところが20数年前、フツと周囲を見回した時、流域の人々は川に背を向けていました。石炭を洗って真っ黒だった頃よりも川から人の声が消えてしまいました。そこに川があることさえ気づかないかのように……。

風が吹いたのかもしれません。偶然手にした「大地の川」。こんなに川を想う建設省の人がいること、そして身近な遠賀川工事事務所にも……。そこで私たちは1996年「直方川づくり交流会」を発足。女性11名、男性11名の住民と、建設省の職員、直方市役所、県土木の人たち約30名で自慢できる川づくりの実現に向けて勉強会を始めました。テーマは「50年後の遠賀川夢プラン」です。普通は、予算の裏打ちも全くない住民 vs 法律遵守の役人の構造が予想されるのですが、「夢だから、夢なんだから」の勢いで楽しくワイワイガヤガヤと話し合いは続きました。ただ、50年後は生きてない人達の空論では困るので、場所だけは決めました。直方の顔？ 遠賀川本川と最大支流彦山川の導流堤周辺です。

会議場を転々とする中で、川のことで集まる拠点の話がどうやらメインになりました。もちろん川の見学（川行き）は平行して実施。福岡県内から四国、ついにはスイスまで……。

拠点づくりは、第1回提案式という形で関係者と、そうでもない人まで集まってもらい発表しました。屋



第1回提案式における導流堤周辺の絵

上からの草スキーは序の口で、温泉などは普通の提案。されど、数回来れば飽きるようなジオラマなど、いらんモノはいらん！と。玉石混交なれど、何が玉でどれが石なのかは人によって変わります。そんな中で出来上がったのが現在の水辺館なのです。

夢は言い続ければ叶うこともあるのだと“バンザイー”です。

その後も「遠賀川夢プラン」として、範

囲や内容の異なる提案式を実施し続けました。その中で私たちが身に着けたものがあります。夢を語ることは責任を持つこと、自分の夢を話す時は相手の話もよく聞くこと。そして、際（きわ）と言うキーワード。流れる水と岸の際、山と川の際、行政と住民の際、メンバー同士の際……。異なるモノが合わさって一つのまとまった景観を成す「際」には、適度な緊張が必要だということ。そして、異なるモノは異なるモノと認めた上で集まらないと何も進まないこと。これらは、川行きの先々で出会った皆さんや川そのものから学んだことです。

一方、遠賀川水辺館という拠点を得たおかげで、従来から実施していた「リバーチャレンジスクール」も充実してきました。月1回のペースで流域の子ども達に、カヌーや菜の花染めなどを実施していましたが、普通に様々な人達が訪れるようになると、新たな展開が生まれました。高校生が立ち上げた「YNHC^{※1}」に始まり、めだかの学校（小学生対象のクラブ）。卒業したYNHCの生徒が大学生になって作った「JOC^{※2}」と「SWEEP^{※3}」。

さらには、若いモノには負けられん！と「おやじの会（60代〜）」。

どうせならと幼稚園前の子どもやお母さんも巻き込んで作った「キッズ」。まるで、揺りかごから墓場までの年齢層です。また、YNHCの子ども達の中には、世界子ども水フォーラムで日本代表として、メキシコ、トルコ、フランスへと国際的に活動の場を広げた子もいます。

川を通して環境を考え行動し、ふるさとを大切に思い、自慢できる地域を次世代の子ども達にバトンタッチしたい。それが、世代が繋がった活動なら出来ると信じています。



遠賀川左岸からの水辺館全景



水辺館1泊2日のサマーチャレンジスクール



水辺館前遠賀川におけるカヌースクール



YNHCの子ども達とビオトープのホタル小屋



世界子ども水フォーラム フランス大会

(文責：NPO 法人直方川づくりの会)

- ※1 Youth Natural History Club：青少年博物学会
- ※2 Joint of College：九州を中心とした大学生・若者間の災害復旧ボランティアネットワーク
- ※3 Students Watershed Environmental Education Project：近畿大学産業理工学部生物環境化学科環境無機化学研究室内に設置されているサークル



遠賀川リバーチャレンジスクール

遠賀堀川 Ongahori River

(福岡県)

子ども達が描く夢の「宝川」目指して



遠賀堀川は北九州市八幡西区楠橋の寿命唐戸から中間市の中間唐戸、水巻町河守神社、北九州市折尾駅前を流れ洞海湾へと注ぐ、全長約12kmの人の手で掘られた人工運河です。

江戸時代、嘉麻（遠賀）川の洪水に悩まされていた筑前国福岡藩主黒田長政は、遠賀川の水を二分して洞の海（現洞海湾）へ養水（用水）路を掘削して水を流し、洪水対策や灌漑用水として利用することを計画しました。工事が始まったのは元和7（1621）年です。2年半後、藩主長政が急逝し、黒田騒動により中止されるなど、数度の長い中断がありました。それでも宝暦12（1762）年、下流側が洞の海につながり、遅れて中間唐戸も築造されました。しかし、響灘の満潮期と遠賀川の増水が重なったときは水が逆流して鞍手郡（現中間市、北九州市の一部が含まれる）に被害が出るので、

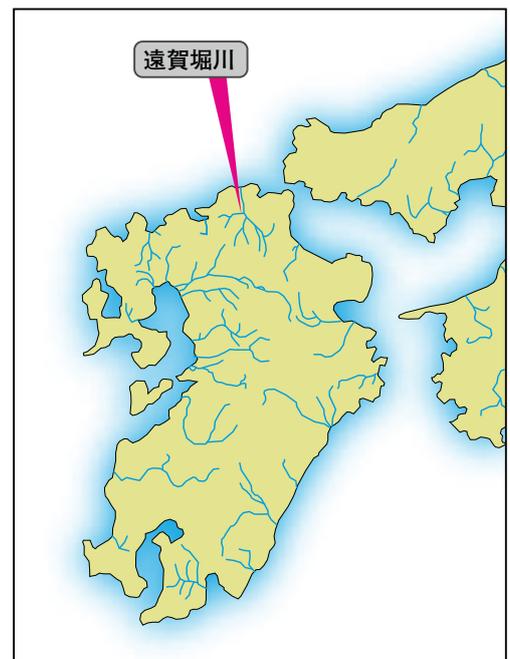


普段の遠賀堀川

文化元（1804）年、上流に寿命唐戸を築造しました。ここに「遠賀堀川」が183年という年月を経て、ようやく完成しました。一番の難工事は約400mの車返しの岩山の切り貫きで、寛延4（1751）年からタガネやクサビを用いて高さ20m幅約7mを切貫く工事に約9年の歳月を費やしまし



水巻：車返切貫の壁に残るタガネの跡



た。今でもタガネの跡や線刻文字が岩肌に残り、往時の苦労が偲べれます。これにより、福岡藩の石高が約2万石増加したそうです。加えて、この堀川を利用して、川ひらた（通称 五平太船）による

石炭や年貢米、農産物の運搬などが天候に左右されず、これまで1ヶ月かかっていたところが3～7日で行き来できるようになったので、交易が次第に盛んになり、通航料（最盛期には1か月約1,800万円位）等の収入も増え、流域の街も栄えました。遠賀堀川に住む人たちは、川の水を飲料水や炊飯に利用し、シジミやウナギ、ドジョウなどが食卓を飾り、いつしか「宝川」と呼ばれるようになりました。

筑豊炭田の石炭を川ひらたで若松港まで運び、日本の近代化を支えました。最盛期には、1年間に十数万艘もの川ひらたが通航したそうです。しかし、明治中頃から鉄道の普及と共に川ひらたの往来は衰退し、とうとう昭和13（1938）年に川ひらたの姿は消えてしまいました。

現在、遠賀堀川は各所で途切れ、家庭排水や雨水だけが流れる、源流のない川となりました。そのため、水質は著しく悪化し、川底には嫌気性汚泥（ヘドロ）が厚く堆積し、ひどい悪臭にも悩まされ、流域住民から「臭いから川に蓋をして欲しい。」という声が上がりました。

でも、それでいいのでしょうか？それは、先人たちが2世紀もかけて、タガネの刃が2時間ももたない固い岩盤を掘り貫いたという、想像を絶する苦勞と努力を否定することだと思えます。「確かに、今、流域にすむ人たちは泣いています。しかし、遠賀堀川



魚釣り大会 はじける子どもたちの笑顔

は、もっともっと泣いているのではないのでしょうか。こんな遠賀堀川をほっとけなかった」のです。しかも、汚したのは現代の私達です。先人たちは「堀川筋条目」という決まりをつくり、流域の皆で大切に、大切に使っていたのですから。

「大正中頃まで清流だった」遠賀堀川に、ホタルが乱舞し、皆に愛され親しまれる川に甦って欲しい。早速、私たちは平成15(2003)年「堀川再生の会・五平太」を立上げ、毎週金曜日にEM（有用微生物群）の投入や周辺の清掃を始めました。また、小・中・高校



EMだんご投入の様子



毎週金曜日・EM発酵液投入の様子



水生生物・水質調査の様子

生らと一緒にEMだんごの投入（今までに約22万個）や年1・2回の水生生物・水質調査等を郷土学習・環境教育の一環として行い、推移を見守っています。



堀川五平太座による車返久作伝「筑前ナッコラン節」
鳴り止まぬ拍手の中、演じた皆さんと感動の舞台挨拶



九州・山口の近代化遺産を世界遺産に in 水巻

平成 15 (2003) 年の水質調査では BOD8.0mg/l でしたが、平成 24 (2012) 年のそれは 1.2mg/l に下がり、1000 匹位の魚の群れが帰ってきました。そこで平成 24 (2012) 年 11 月、初めての魚釣り大会を実施しました。

特筆すべきは、私たちの活動は常に民学官三位一体となって行っていることです。平成 16 (2004) 年、「堀川開削 200 年」記念事業として北九州市と協働で「ほりかわサミット 2004」を開催しました。平成 19 (2007) 年には「車返切貫開削 250 年」記念事業として「堀川五平太座」を立ち上げ、国土交通省、福岡県北九州県土整備事務所の皆さんはキャストとして、堀川の歴史物語、車返久作伝「筑前ナツチョラン節」を 4 回公演しました。中でも、同年 12 月に大分県別府市で行われた「第 1 回アジア・太平洋水サミット」のオープニングイベントで日本代表として公演し「遠賀堀川」を世界にアピールしたことは、誇らしい記憶として残っています。

その最中に「遠賀堀川が国から近代



近代化産業遺産認定証



九州・山口の世界遺産を目指して



川ひらた 70 年ぶりに復活



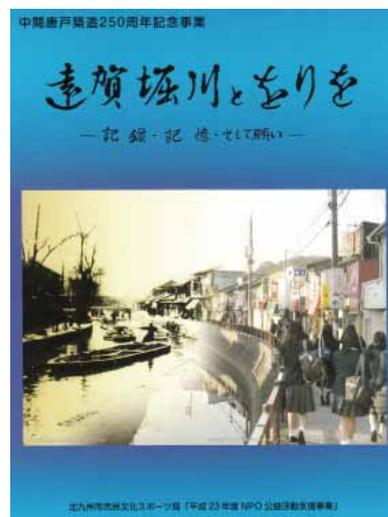
試乗体験の様子

化産業遺産に認定された」というビッグニュースが飛び込みました。翌平成 20（2008）年、その記念事業として、福岡県北九州県土整備事務所と一緒に、遠賀堀川に 70 年ぶりに「五平太船」を浮かべ、市民の方々に試乗体験をしていただきました。「柳川よりも風情がある」と称されるほど、それは美しい光景でした。

平成 22（2010）年、九州・山口の近代化遺産を世界遺産にと、「筑豊炭田～堀川～八幡製鐵」というテーマでシンポジウムを水巻町と行いました。



子ども達が描いている夢の「宝川」



遠賀堀川のバイブルとして

毎年福岡県と行っている「ふくおか水もり自慢」や「福岡県景観大会」などでも寸劇や講演発表を通して「遠賀堀川」をアピールしています。平成 24（2012）年には「中間唐戸築造 250 周年」記念事業として、冊子「遠賀堀川とをりを」を北九州市の補助金をいただいて発刊し、北九州市・水巻町・中間市の小学校・図書館に寄贈しました。その他、「記憶の財産を子らに一昭和の遠賀堀川」を刊行するなど「遠賀堀川の歴史や文化を掘り起こし、記録、継承する」活動も積極的に行っています。

まだまだ道半ばですが、こども達が描いている夢の「宝川」に向かって、これからも活動を続けていきます。

～子どもたちに希望ある未来を用意するために～

（文責：堀川再生の会・五平太）



堀川運河 12Km の旅物語

CASE
10

巖木川

Kyuragi River

(佐賀県)

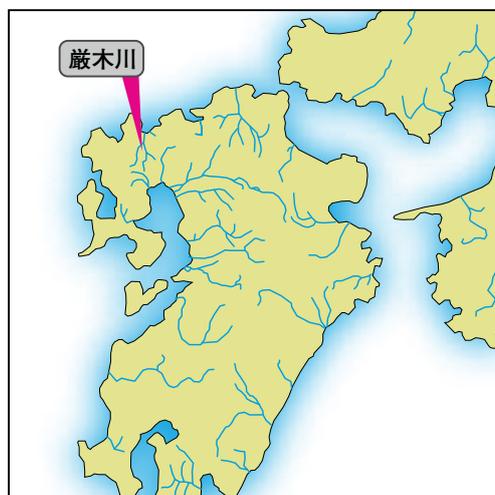
ふるさとの水文化を守り伝える川づくり

水車が回るこの地区は、佐賀県の北西部に位置し、巖木川の中流域にあって、水質もいたって良好で、今から4万年前は海岸線と言われ、河床付近の岩肌は、永い間多くの変遷を繰り返して出来た甌穴の跡など、その時代の歴史を刻んでいます。

また町切堰から取水する頭首工付近に特殊な構造物の石に残る「矢(楔)の痕」や「龍骨」という文字が刻まれており、4基の水車(以下、町切水車と云う)が復元され田園を潤しています。

この「町切用水」は延長距離(約5km)に及び、4つの集落の田んぼ(27ha)に水を注ぎ再び巖木川に戻り、やがて松浦川と合流して玄海灘に注ぎます。

この「町切水車」は江戸時代初期に「町切堰と用水路」が築造され、町切地区には8基の水車が稼動していた記録があり、永い間この地区の暮らしを守ってきました。100年前の明治30年代の日本列島には、43,000基もの水車が近代化の基礎を築いてきました。しかし、戦



水車が回る水路(手前)と巖木川(上)



昭和35年頃 巖木川で遊ぶ(子ども会)

後の復興から近代化が進むにつれ社会環境も変る一方、水質の悪化も進み全国の水車も急激に減少し、この地区の水車も平成8(1996)年は2基にまで減り、水路は3面コンクリート張り、水際一帯は草木が繁茂し川辺に近づく人影もありませんでした。

このような環境の中で、同年7月に地域の有志たちで「研究会」を発足し、平成10(1998)年から毎年1基ずつ、4基の水車を復元しました。そして毎年田植え前の5月中旬に地域の子どもたちも一緒に「町切水車取付け研修・体験交流会」と銘打った活動を実施しています。

平成15(2003)年からは傍を流れる「巖木川」沿いに手作り散策橋や除草作業や瓦礫の除去、彼岸花の植栽などの環境美化と安全対策の環境整備に取り組んでいます。時を同じくして近隣の小中学校では、子どもたちの生きる力を育む為に「総合的な学習」の時間が始まった時期でもあり、学校との連携事業として活動をはじめ、早8年目を迎えます。



6月：小学校3年生 川の探検



7月：小学校3年生水辺（水車）の見学会



8月：川の水質調査
(全員でバックテスト)

時には佐賀県の委嘱を受けた「環境サポーター」の方々を講師に招くなど、時代を背負う子どもたちがさまざまな体験を通じて、水環境の多様な役割を学び、身近な水環境と生活（暮らし）の課題に気づき、その解決策を探ることを側面的に学習支援しようと学習支援プロジェクトを結成しました。これまでの活動が評価を受け、平成18（2006）年度に農林水産省より「美の里づくり審査会・特別賞」、平成22（2010）年度に「日本水大賞・奨励賞」などの賞を頂きました。



8月：川流れ体験

以下これまでの学習支援の実施事例の一部を紹介いたします。

「地区の川（水辺）を探検・散策しながら、川筋に点在する川の様子（流速・流量・形・生き物・水質・ゴミ）や構造物（魚道・鉄道橋・災害改修記念碑・堰・用水路・水車）など、川筋には地域の暮らしと関わる多くの歴史や文化が残っている事などの話を聞き、6～7人からなる「ひとつの班」ごとに『テーマ』を決め、環境サポーターの体験・調査指導によって進める。」…を案とした企画書を作成しました。新学期に入ると、近隣の小中高校を訪問し「総合的な学習」の時間を活用した水辺の体験学習の企画書（プログラム）をもって、教育機関と協議しています。



8月：川の安全教室

6～7月には、11月頃まで水車が回る用水路・田んぼ、そして巖木川一帯において見学会・川の探検会を行い地域の特性を発見することから体験学習は始まります。続いて「魚の観察会」、「水質調査」、「稲の生育調査」、「稲刈り体験」などを通して、自然と暮らしのかかわりの学習支援活動をしています。そして2学期または3学期に父兄や地域の人を招いて発表会を開催しています。



9月：牛乳パックと割り箸・大根で
水車を回す



平成18年9月豪雨による土石流で母校に被害：
中学生の災害復旧支援活動



11月：小学校にて父兄を招いて発表会

(文責：自然と暮らしを考える研究会)

五ヶ瀬川 Gogase River

(宮崎県)

五ヶ瀬川流域ネットワーク

九州山地中央の五ヶ瀬町に端を発し延岡市から日向灘に注ぐ、宮崎県の北部を流れる五ヶ瀬川は、平成24(2012)年の良好な河川水質ランキングで日本一となりました。この川も上流域はブナ、檜などの良好な森林が続き、昭和の中頃までは日向薪炭や木材の産地として栄え、川を使って木材の搬出等も行われていました。また、豊富で良質な水に目をつけて旭化成が工場を立地し、工業用水としてだけでなく、発電事業も行い、水の恵みを十分に活用した地域でもあります。

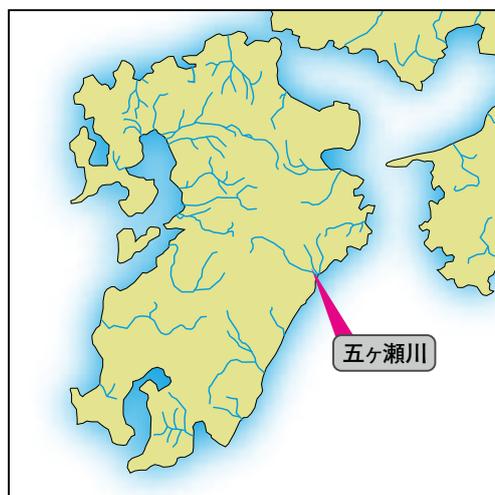
五ヶ瀬川は鮎でも有名で、毎年6月1日から、鮎漁が解禁になります。10月になると市街地の中に「鮎簀」が掛かり、落ち鮎を楽しむ仮設の料理小屋も作られます。

しかし、五ヶ瀬川の流域全体は、原則、遊泳禁止となっているため、子どもが川で遊ぶことが、ほとんど無くなってしまっていました。

そこで、子ども達を川へ誘うため女性団体が中心になって「リバーフェスタ」を開催し、今年で19年目になります。19年続ける内に実行委員も若者が中心となり、助成金に応じてさまざまなイベントを工夫して来ましたが、今でも一番人気は「川プール」と「Dボートレース」です。

「川プール」は文字通り川にロープを張って、監視員が張り付き、スタyroフォームの板に乗ったり、ペットボトルの筏に乗って遊んだり、ライフジャケットで泳いだり出来るようにしています。最近では、川の安全教室も人気で、川の上手な流れ方や、スローロープによる救助の練習などもしています。

「Dボート」は段ボールで作った舟をブルーシートで覆い、乗って遊ぶものです。これは児童館などからも希望があり、毎夏5回以上開催しています。一度は韓国からも視察に見えまし



延岡筏流し(昭和12(1937)年)



リバーフェスタ

た。1時間乗るとどの舟も必ず沈んでしまい、それも楽しいのですが、濡れた段ボールは、「カミネッコン」という段ボールの枠に詰め植木鉢に再利用して参加者に木の苗をプレゼントしています。

干潟遊びやカヌースクールも頻繁に開催していますが、毎年、車椅子利用者を対象としたカヌースクールも開催し喜ばれています。

しかし、昔に比べると川の豊かさは次第に失われてきています。それは上流の森林の荒廃や過疎化高齢化が進んで限界集落も増え、棚田や農業用水の維持管理も難しくなり、放置された棚田や高性能林業機械で大量に伐られた後の無植栽地や林地残材の山も目立つようになっています。

そこで上下流交流のイベントなどを企画し、上流で地域の維持に頑張っている人々を訪ね交流をすると同時に、集落維持にどのような手助けが必要かを聞き取り、その情報を沢山のひとと共有出来るような発信にも力を入れています。

しかし各地を訪ねる中で、もはや上流地域は五ヶ瀬川流域の力のみでは再生出来ないくらい厳しい事になりつつあると



干潟遊び



カヌースクール



大学生の休止中の炭焼窯見学

判断して、東京で地域再生などの勉強をしている大学生に呼びかけ、こちらに来て視察体験し地域再生のアイデアをもらおうという企画も始めました。

河川管理は山から海までを繋ぐ生態系が健全に維持され、そこで誇りを持って暮らしていける人の存在も重要です。上流から河口まで、適材適所に必要な人材を維持し、それぞれが誇りを持って地域で食べて行けるような仕組みづくりを目指して頑張っています。



Dボートレース



Dボート遊び

(文責：NPO 法人五ヶ瀬川流域ネットワーク 土井裕子)

埼玉県における「川の再生」の取組

(埼玉県)

CASE
12



1. 埼玉県と川

埼玉県は、都心から近く、発達した公共交通機関や道路網を有する一方で、貴重な水と緑に恵まれた田園地帯が多くあります。とりわけ水辺空間は県土に占める河川の面積割合が3.9%で、全国47都道府県中最も高く、また県の中央を流れる荒川の川幅も鴻巣市と吉見町の間で約2,500mもあり日本一広がっています。このように埼玉県は河川という切り口で注目することができます。

そこで埼玉県では、川（河川と農業用水）という資産を活用して、県民誰もが川に愛着を持ちふるさとを実感できる「川の国 埼玉」を実現するため、平成20（2008）年度から「川の再生」に取り組んでいます。

2. 川の再生基本方針の策定

「川の再生」の推進にあたっては、平成19（2007）年11月に「川の国埼玉 川の再生基本方針」を定めました。その目標を県民誰もが川に愛着を持ちふるさとを実感できる「川の国 埼玉」を実現すること、川が地域の共有資産として広く県民に認識され、地域による持続的・自立的な改善行動、維持管理活動が行われることとしています。

この目標に向け、「清流の復活」と「安らぎと賑わいの空間創出」の2本柱の方針のもと、県と地域（地域住民、市民団体、市町村等）が連携・協働し、取り組んでいます（図-1）。

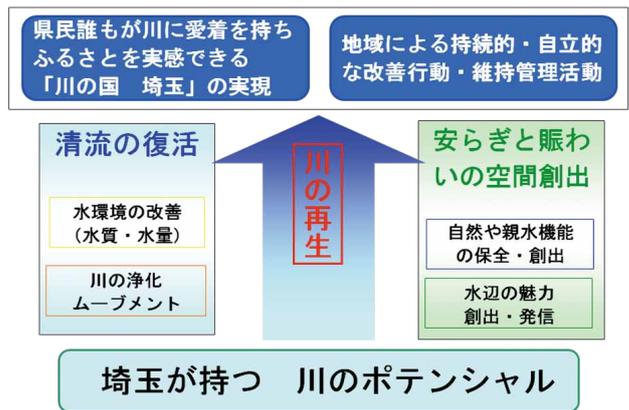


図-1 川の再生基本方針

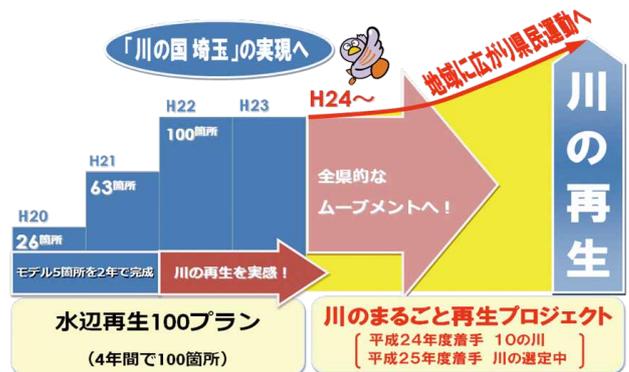


図-2 川の再生に向けた事業展開

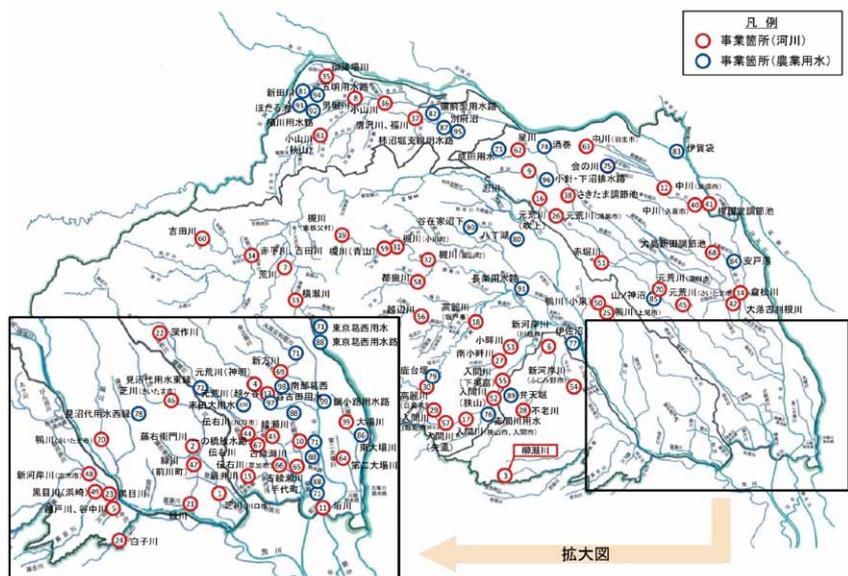


図-3 川の再生に向けた事業展開

3. 川の再生に向けた事業展開

1) 平成 20 (2008) 年度から「水辺再生 100 プラン」を実施 (図-2)

まずは川の再生のリーディング事業として、スポット的な親水施設整備などの水辺の再生を行う「水辺再生 100 プラン」を展開しました。平成 20 (2008) 年度から 4 年間で県内 100 箇所 (河川 70 箇所、農業用水 30 箇所) の再生を実施しました (図-3)。

2) 平成 24 (2012) 年度から「川のまるごと再生プロジェクト」を実施 (図-2)

平成 24 (2012) 年度から平成 27 (2015) 年度までの 4 年間で 1 つの市町村もしくは複数の市町村を流れる川をまるごと対象にして、川の環境の再生やまちづくりと一体となった川の再生にステップアップした「川のまるごと再生プロジェクト」をスタートしました (図-4)。

- ◆ 「スポットの再生」から
「線・面」への再生へ
- ◆ 観光施設や散策路休憩施設など、
市町村の「まちづくり」と一体整備

県と市町と地域の取組例

県	<ul style="list-style-type: none"> ● 遊歩道整備 ● 親水護岸整備 ● 河原の再生 など
市町	<ul style="list-style-type: none"> ● 公園など拠点施設の整備 ● 案内板やまちなかの散策路整備 ● 下水道や合併処理浄化槽への転換 など
地域	<ul style="list-style-type: none"> ● 維持管理活動 (美化活動)

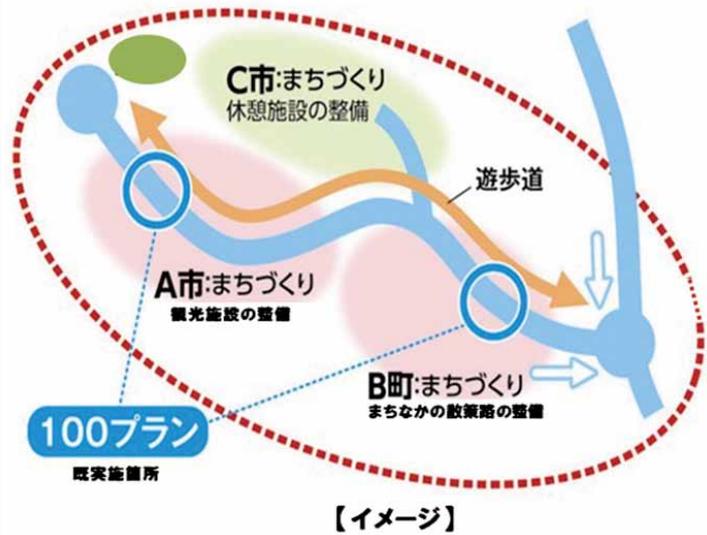


図-4 川のまるごと再生プロジェクトのイメージ

4. 事業の進め方の特徴

1) 実施箇所の選定について

「水辺再生 100 プラン」の実施箇所及び「川のまるごと再生プロジェクト」の対象河川は、公募により選定しています。「水辺再生 100 プラン」は県民個人や団体から提案を直接公募したのに対し、「川のまるごと再生プロジェクト」では、県民と市町村と一緒に提案する方法へと変更しました。

募集にあたっては、整備後に持続的な河川環境を保全するため、「水辺再生 100 プラン」、「川のまるごと再生プロジェクト」とともに川に係る整備内容と併せて、自分たちがその川でできる維持管理などの活動も提案にあたっての条件としました。特に「川のまるごと再生プロジェクト」の提案公募では、まちづくりと一体で川の再生を進めることが重要であることから、市町村の取組や地元地域が川を生かした活用などの活動も条件に加えました。

2) 事業実施について

事業実施にあたっては、「水辺再生 100 プラン」、「川のま



写真-1 水辺再生 100 プラン検討会風景

るごと再生プロジェクト」とともに、「計画づくりから維持管理まで地域と連携する」をコンセプトに事業を進めています。

これは、地域の情報や意見を川づくりに反映することはもとより、現状や課題等を地域の皆さんと共有し役割分担をすることで、地域の皆さんが末長くその河川を愛し大切にしていけることが重要と考え、地域との関わりを大切にしようとしたものです。

写真-1は、「水辺再生100プラン」の実際の検討会の様子です。検討会は地域住民、河川愛護団体や市町村などのメンバーで構成し、整備内容や維持管理方法に関して意見交換しながら、整備計画を作成しました。

このように事業箇所の提案、計画づくりなどから地域住民と協働で進めたことで、多くの団体や住民が自ら川に対して責任を持ち美化活動を率先して実施していると感じています(写真-2)。

「川のまるごと再生プロジェクト」でも同様に、地域の皆さんとともに検討を進めています。ただし対象範囲が水辺再生100プランより大きく、複数の市町村に関係するため全体会と部会の2階層にしています。全体会は上流から下流まで全ての範囲を対象とし、部会は市や町ごとに設置し進めています(図-5)。



写真-2 水辺再生100プラン整備箇所における地域の活動状況



図-5 川のまるごと再生プロジェクト推進体制イメージ図

5. 「水辺再生100プラン」を実施して

「川の再生」の取組効果は全県的な県政世論調査(表-1)と「水辺再生100プラン」実施箇所におけるアンケート調査(表-2)により把握しています。県政世論調査は2年おきに県民意識の変化に関して埼玉県民3,000人を対象(有効回収率約70%)に無作為抽出により実施しています。効果については、平成24(2012)年度の調査結果を平成20(2008)年度及び平成22(2010)年度結果と比較しています。

「みどりと川の再生の取組の認知度」「川に対する県民満足度」は上昇しており、みどりと川の再生の取組が県民に浸透し、県民の満足度も確実に向上しています。なかでも「川の再生の取組に対する評価」は、約7割の方から「よい」とされ多くの県民から高い評価が得られています。

また「近くの川の評価」は、「水がきれい」と「景観」の2項目について、良くなっていると感じてい

表-1 県政世論調査の結果(%)

①「みどりと川の再生」の認知度

知っている			知らない		
H20	H24	増減	H20	H24	増減
22.9	33.0	10.1	76.9	65.2	-11.7

②川に対する満足度

満足			不満		
H20	H24	増減	H20	H24	増減
21.7	25.7	4.0	53.4	36.6	-16.8

③川の再生の取り組みに対する評価

よい			悪い		
H20	H24	増減	H20	H24	増減
54.9	69.1	14.2	4.5	2.4	-2.1

④-1 近くの川の評価(水がきれい)

そう思う			思わない		
H20	H24	増減	H20	H24	増減
18.5	25.5	7.0	72.9	56.2	-16.7

④-2 近くの川の評価(川の景観)

よい			悪い		
H20	H24	増減	H20	H24	増減
21.9	28.7	6.8	67.3	51.4	-15.9

表-2 水辺再生100プランのアンケート結果(%)

④-1 近くの川の評価(水がきれい)

	そう思う			思わない		
	整備前	整備後	増減	整備前	整備後	増減
全体	10.3	26.2	15.9	56.4	32.1	-24.3
藤右衛門川	1.1	27.0	25.9	73.8	18.9	-54.9

④-2 近くの川の評価(水の景観)

	よい			悪い		
	整備前	整備後	増減	整備前	整備後	増減
全体	27.4	58.6	31.2	38.5	10.1	-28.4
東京葛西用水	33.2	71.2	38.0	43.2	14.9	-28.3

る県民が増えてきている傾向が伺うことができます。

水辺再生 100 プランの実施箇所では、箇所ごとに原則、整備前後でアンケート調査を行っています。

「水がきれい」の項目では、水辺再生 100 プランの全体と県政世論調査の比較結果から、河川環境整備事業を実施した箇所が平均的に高くなっており、事業が県民の水辺に対する印象を良好にしている傾向になっていると言えます。例えば「藤右衛門川」(図-6)では、特に大きく上昇しています。



図-6 (整備事例) 芝川、藤右衛門川：テーマと整備前後

このほか、県では地域住民や市町村などと協働するため、「川の国応援団(美化活動団体)支援制度」を設け地域住民への活動をサポートしており、登録数が県民の川に対する関心度を測ることの出来る指標と考えています。登録数は、平成 19 (2007) 年 4 月時点で 49 団体であったが、水辺再生事業箇所をはじめ、県内各地で登録していただき、平成 24 (2012) 年 3 月末現在で 280 団体と約 6 倍に増加しました(図-7)。

※川の国応援団(美化活動団体)

県管理河川の二級河川で美化活動などを行う地域住民等で構成される登録団体。

県は住民等が活動する際に必要な保険加入やゴミ袋などの消耗品の提供を行い、市町村が清掃後のごみの収集処分を行うなど登録団体の活動を支援します(図-8)。

- 川の国応援団(美化活動団体)数は約6倍に増加
- 川の国応援団(美化活動団体)の活動延長も114kmから約400kmに増加

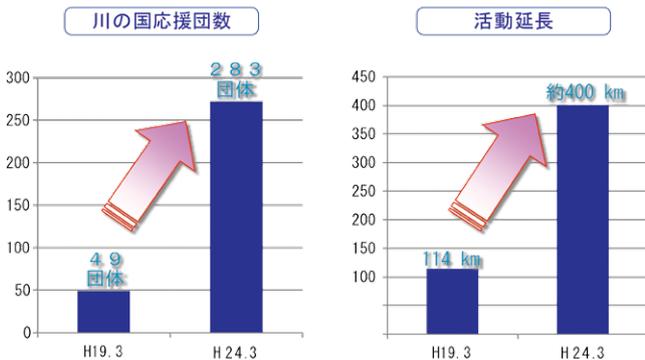


図-7 川の国応援団の登録推移

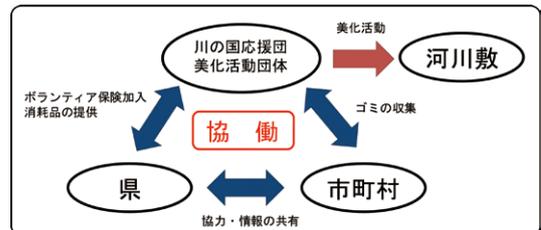


図-8 「川の国応援団(美化活動団体)」制度イメージ

6. 「川のまるごと再生プロジェクト」を進めるにあたって

前述のとおり、川の再生のリーディング事業として実施した「水辺再生100プラン」により一定の成果が確認されています。「川のまるごと再生プロジェクト」では、さらなる川に対する県民の関心や活動に関する拡大を期待しています。

埼玉県の川の再生は、県民、市町村、県による協働の取組であることが最大の特徴と考えています。「川のまるごと再生プロジェクト」は、現在10の河川や農業用水で民官協働による検討会が進められており、工事に着手した箇所も出てきました（図-9）。平成25（2013）年度からも新たな川で着手する予定であり、現在選定作業を進めており、今後もこの取組が広がっていきます。このプロジェクトのもう一つの特徴は、市町村のまちづくりと連携して進めることです。この取組により、「川」に関心の高い人々が「まちづくり」にも興味を持ち、「まちづくり」に関心の高い人々が「川」にも興味を持つと考えています。今後も「川を含めたまちづくり」に積極的に関わる人々が増えていくという好循環をつくり線的、面的に広がりを持った「川の再生」を進めていきます。

また、川の再生を進めていて、河川環境整備は、県民の川への関心を上げるきっかけづくりはできたと実感しています。しかし、県民の方々の行動において好循環を生み出すためには、県民一人一人が川を守り・育てる心と行動が、多くの人々へ伝わりさらなる気運醸成につながるものと考えています。このため、県民の「川の再生」に関する気運を高めることを目的に、イベントなどの様々なソフト施策も併せて進めていく必要があります。本県ではカヌー体験など川の楽しさを実感できる川遊びイベントを開催し、川の魅力を発信しています。そのほか、ゆるキャラなどの活用により台所への三角コーナーの設置や油を流さないことなど家庭から川に汚れを出さないための意識啓発を図る取組なども併せて行っています。

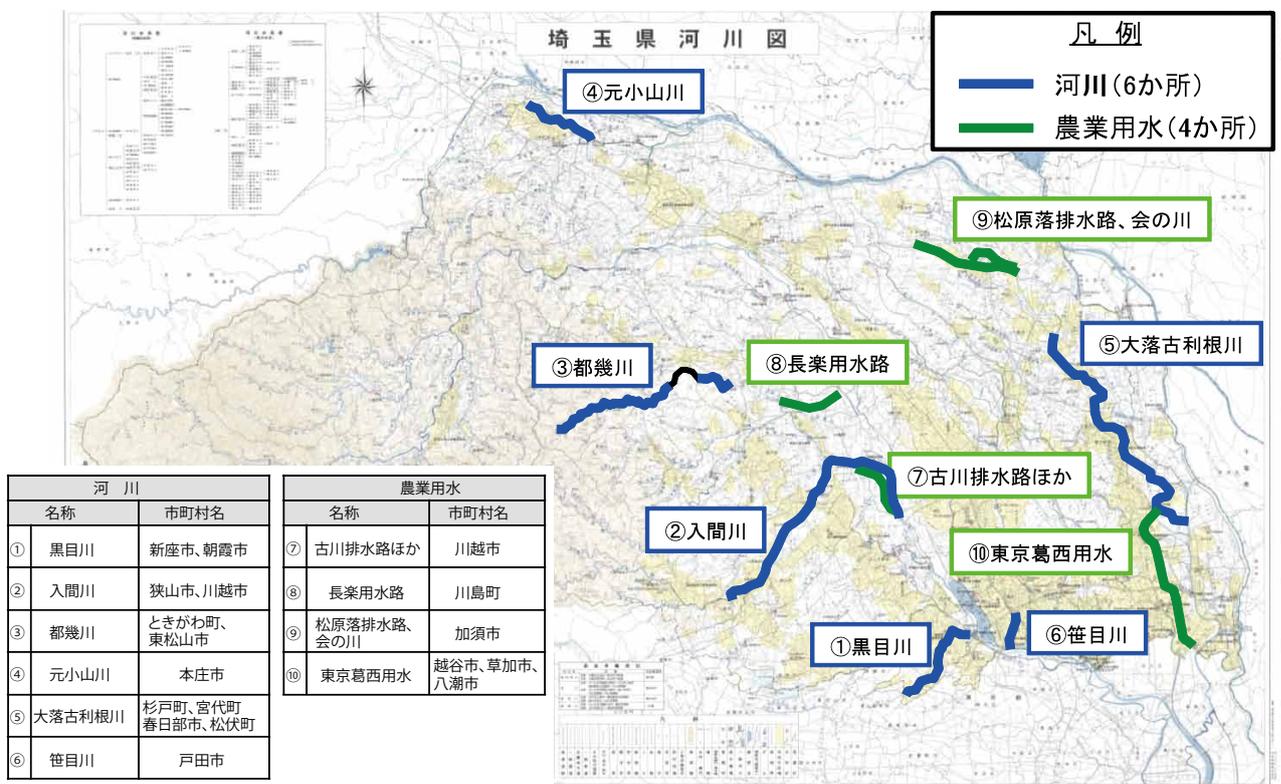


図-9 10の川箇所図

表-3 水辺再生100プラン 箇所一覧表

○河川

No.	名称	市町村名
1	芝川	川口市
2	藤右衛門川	さいたま市、川口市
3	柳瀬川	所沢市
4	元荒川(神明)	越谷市
5	越戸川・谷中川	和光市
6	新河岸川	川越市
7	荒川	秩父市
8	男堀川	本庄市
9	忍川	行田市
10	古綾瀬川	草加市
11	圀川	八潮市
12	中川	加須市
13	元荒川(越谷)	越谷市
14	倉松川	春日部市
15	辰井川	川口市、草加市
16	元荒川(吹上)	鴻巣市
17	入間川(入間)	狭山市、入間市
18	高麗川	坂戸市
19	槻川	東秩父村
20	鴨川	さいたま市
21	緑川	川口市
22	深作川	さいたま市
23	黒目川	朝霞市
24	白子川	和光市
25	鴨川	上尾市
26	元荒川	鴻巣市
27	南小畔川	川越市
28	不老川	狭山市
29	入間川	飯能市
30	高麗川	日高市
31	槻川	小川町
32	槻川	嵐山町
33	横瀬川	横瀬町
34	赤平川・吉田川	秩父市
35	御陣場川	上里町

○河川

No.	名称	市町村名
36	小山川	本庄市
37	唐沢川・福川	深谷市
38	さきたま調節池	行田市
39	大場川	吉川市
40	中川	久喜市
41	権現堂調節池	幸手市、久喜市
42	大落古利根川	春日部市
43	綾瀬川	草加市
44	伝右川	川口市、草加市
45	元荒川	さいたま市
46	芝川	さいたま市
47	緑川(前川町)	川口市
48	新河岸川	志木市
49	黒目川(浜崎)	朝霞市
50	鴨川(小泉)	上尾市
51	赤堀川	桶川市
52	入間川(狭山)	狭山市
53	小畔川	川越市
54	新河岸川	ふじみ野市
55	入間川(下奥富)	狭山市
56	越辺川	越生町
57	入間川(矢風)	飯能市
58	都幾川	ときがわ町
59	槻川(青山)	小川町
60	吉田川	秩父市
61	小山川(秋山)	本庄市
62	星川	行田市
63	中川	羽生市
64	第二大場川	三郷市
65	古綾瀬川(手代町)	草加市
66	伝右川	草加市
67	一の橋放水路、伝右川	草加市
68	大島新田調節池	幸手市、杉戸町
69	新方川	越谷市
70	元荒川	蓮田市

○農業用水

No.	名称	市町村名
1	東京葛西用水	越谷市、草加市、八潮市
2	見沼代用水東縁	さいたま市
3	成田用水	熊谷市
4	酒巻	行田市
5	会の川	加須市
6	赤間川用水	入間市
7	伊佐沼	川越市
14	見沼代用水西縁	さいたま市
17	鹿台堰	日高市
10	八丁湖	吉見町
9	新田川	神川町
12	備前渠用水	深谷市
8	伊賀袋	加須市
15	安戸落	春日部市
16	山ノ神沼	蓮田市
11	東大場川	吉川市
13	別府沼	熊谷市
18	東京葛西用水路	越谷市、草加市、八潮市
19	弁天堀	狭山市
20	谷在家沼下	滑川町
21	長楽用水路	川島町
22	桶川用水路	神川町
23	ほたる池	神川町
24	五明用水路	上里町
25	柿沼堀支線用水路	熊谷市
26	小針・下沼排水路	行田市
27	谷古田用水	越谷市
28	南部葛西	越谷市
29	鍋小路用水路	吉川市
30	末田大用水	越谷市

() : 工区名

埼玉県の「川の再生」の情報を詳しく知りたい方は、下記HPをご覧ください。

埼玉県HPアドレス：<http://www.pref.saitama.lg.jp/soshiki/108/>

(文責：埼玉県県土整備部水辺再生課)

団体プロフィール

荒川（荒川水系）P8

団体名： 特定非営利活動法人 荒川クリーンエイド・フォーラム

Tel： 03-3654-7240

E-mail： renraku@cleanaid.jp

主な活動： 国土交通省荒川下流河川事務所及び沿川の自治体と連携して、市民・企業・学校などが参加する調査するゴミ拾い「荒川クリーンエイド」を運営しています。ゴミ拾いの他にも、河川敷の外来植物除草やモニタリング、環境教育、流域連携などを通して、市民の環境保全意識を高め、荒川の生物多様性の保全を行っています。

主な場所： 荒川流域（埼玉県・東京都）

一言： 荒川でゴミ拾いを実施される団体・個人を募集しています。さらに、全国の河川の同様な活動を結集してより大きな活動とすべく「ふるさとの川クリーン大作戦」を始めました。川ゴミ拾い実施の団体さんご連絡下さい。

荒川（荒川水系）P12

団体名： 特定非営利活動法人 あらかわ学会

Tel： 03-5284-7885

E-mail： info@arakawa-gakkai.jp

主な活動： 荒川での活動や研究を発表する「あらかわ学会年次大会」、関東の水辺や川の活動を発表する「川の日ワークショップ関東大会」を開催し、様々な団体や個人の活動の活性化を目指して支援している。他に荒川の歴史民俗や河川管理手法に関する研究・提言、周年事業シンポジウム、本の出版、海外市民団体との交流事業。

主な場所： 荒川

一言： 今年度から姉妹河川提携をしたワシントンDCのポトマック川流域州際委員会との交流事業を開始します。川のレポーターや翻訳のボランティアを募集します。関心のある方はご連絡ください。

綾瀬川（荒川水系）P14

団体名： 特定非営利活動法人 エコロジー夢企画

Tel： 03-3886-6554

E-mail： info@ecoyume.net

主な活動： 綾瀬川をはさんだ足立区や八潮市で、毎年、昆虫・魚・植物などの自然観察会やお月見コンサートを開催したり、足立区の公立プールでトンボのヤゴ救出大作戦を実施したりしています。他に食物残渣の堆肥化提案やまちづくり見学バスツアー、太陽エネルギー講習会、太陽熱利用による東日本大震災被災地支援も行っています。

活動場所： 足立区や綾瀬川流域。

一言： 水質浄化や地球温暖化対策としての自然再生、再生可能エネルギーに関心のある建築家、企業、個人と連携して活動しています。関心のある方はご連絡ください。

石神井川（荒川水系）P16

団体名： 川と水辺を楽しむプロジェクト

Tel： 03-5910-7056（佐藤 英雄）

E-mail： amayachi19@ybb.ne.jp

主な活動： 練馬区を西から東に横断して流れる石神井川。都市部にありながら清流が流れ、三面張り川でありながら、河道に残る緑を大切に活かした川づくりを進めて行きたいと思っています。河に入ったこともない親子たちも参加して、護岸壁からの湧水を見つけて溝を掘り、優しい川づくりを目指しています。

活動場所： 東京都練馬区 石神井川・茜歩道橋下流域

一言： 味気ない都市部の三面張りの一角を工夫して、緑を生かしての“川原ジオトープ”づくりの一貫として、草を刈込んでカモたちの寝ぐらを作ってみました。掘った穴や溝も、小生物の退避場所に。

山崎川（山崎川水系）P22

団体名： 山崎川グリーンマップ

Tel： 052-851-6048

E-mail： yamakawasatomi.ohya@gmail.com

主な活動： 愛・地球博が開催された2005年に、地元の子ども会を母体として誕生したNPOです。山崎川の在来種を守るために、生き物観察会や外来種駆除の活動の他、子どもが主体となった昔の様子の聞き取り調査を行っています。都市化のために、人知れず消えていった生き物を記録として残すという活動もしています。（150文字以内）

活動場所： 名古屋市山崎川

一言： 自分の意思ではなく、人により持ち込まれた外来種たち。今となっては、在来種に悪影響を与える悪者扱いです。かわいそうですが、勝手に持ち込んだ生き物を、取り除くのも人がやるしかないのでしょうか。

諏訪湖（天竜川水系）P26

団体名： 下諏訪町諏訪湖浄化推進連絡協議会

Tel： 0266-27-1111（下諏訪町役場 住民環境課内事務局）

E-mail： kankyou@town.shimosuwa.lg.jp

主な活動： 毎月1回の湖岸清掃を中心として、郷土の宝である諏訪湖を守っています。一見すると環境美化活動に見えますが、清掃を通じて水辺に近づいてもらう、そしてゴミを捨てないという意識を植え付けるための「実践する啓発活動」という意味もあります。こうした活動が、在りし日の諏訪湖を取り戻すための原動力になります。

活動場所： 諏訪湖（長野県下諏訪町）

一言： 諏訪は山紫水明の地であり、冬期には、神の通路「御神渡」という自然現象も姿を見せます。悲劇的な状態から立ち上がり、水辺に人々が帰ってきた諏訪湖の姿を、是非ご覧下さい。

芥川（淀川水系）P28

団体名： 芥川・ひとと魚にやさしい川づくりネットワーク～愛称：芥川倶楽部

Tel： 072-674-7432（高槻市役所 下水河川企画課）

E-mail： akutagawa0726@yahoo.co.jp

主な活動： 芥川を遡上する天然アユをシンボルとして、現在の芥川がさらに地域の人々に親しまれ、多様な生き物が自然なかたちで棲むことができるよう、多くの人々とネットワークを構築して活動しています。具体的には、自然観察会や講座、生物調査、清掃活動、濡筋づくり、特定外来生物「ミズヒマワリ」の駆除活動などを行っています。

活動場所： 大阪府高槻市

一言： 川が好きの方、生き物が好きな方、何かやってみたい方、芥川倶楽部と一緒に活動しませんか？活動のお知らせは、「芥川倶楽部ブログ（<http://akutariv.blog85.fc2.com/>）」に掲載していますので、お気軽にご参加ください。

遠賀川（遠賀川水系）P30

団体名： 特定非営利法人 直方川づくりの会

Tel： 0949-22-1810

E-mail： mbk-bosai@basil.ocn.ne.jp

主な活動： 遠賀川水辺館を拠点とし、川に関わる環境教育を中心に流域内外へ展開。河川環境教育の学校授業対応：50件/年。一般団体の河川体験支援：25/年。自主イベント：50件/年。その他河川環境保全団体との交流および講演依頼対応。

活動場所： 遠賀川水系流域

一言： 活動を始めて気が付くと20年。みんな年をとるはずですが。女性が主力の団体が遠賀川の大奥と呼ばれています（将軍も女性ですが）。一度「遠賀川水辺館」におこし下さい。

遠賀堀川 (遠賀川水系) P32

団体名： 堀川再生の会・五平太

Tel： 093-601-6921 (中村)

E-mail： ayunoboru83@yahoo.co.jp (崎野)

主な活動： 遠賀堀川は人の手で掘られ、近代化産業遺産に認定された、私たちが誇りにしている川です。私たちは人と共生できる川に戻して次世代に渡したいという想いで、毎週金曜日の河川浄化活動、EM 発酵液や EM だんごの投入、年1～2回の水質・生物調査、小学校他へのワークショップや講演活動、堀川の歴史や文化を掘り起し継承するための出版活動などを行っています。今、折尾地区再開発事業が進められている最中で、近い将来、堀川沿いの道路をどのようにするのかという時期が迫っています。

活動場所： 福岡県中間市、水巻町、北九州市折尾等堀川流域一帯

一言： 折尾駅前を流れる堀川沿いには黒田騒動で有名な史跡等が沢山あり、小さな菅原神社も2つあります。そこで、学問の神様の大宰府を学生の街折尾にも造る構想を提案しています。堀川沿いに紅梅を植え、堀川を核とした町おこしを夢見ています。アイデアやご指導をいただけますようお願い致します。

巖木川 (松浦川水系) P36

団体名： 自然と暮らしを考える研究会

Tel： 0955-63-2177 (石盛信行)

E-mail： suisha@pol.people-i.ne.jp

主な活動： 環境教育(体験・観察・調査)支援、出前講座、水辺の環境整備

活動場所： 佐賀県内の水辺(松浦川水系巖木川)

一言： 「河川」「水辺」では自然の営みや暮らしの中で多くの命が生まれ、多くの歴史と文化が残されています。次の世代に繋げるために、水環境の大切さを学び持続可能な社会実現のために「共育」活動に参加しませんか。

※「佐賀県・環境サポーター」派遣制度の活用『問合せ先』kanky@pref.saga.lg.jp

五ヶ瀬川 (荒川水系) P38

団体名： 特定非営利活動法人 五ヶ瀬川流域ネットワーク

Tel： 0982-42-3005

E-mail： info@gokasegawa.com

主な活動： 五ヶ瀬川河口にある河川資料館「リバーパル五ヶ瀬川」を基地に、干潟を使った環境学習や各種観察会、子ども達との川遊びと川での安全教育、河川清掃活動、流域でのカヌースクール、地域と連携したまちづくり活動や田圃での稲作と菜の花栽培、流域を繋ぐ交流事業や地域興し活動などを開催している。

活動場所： 五ヶ瀬川流域

一言： 川の流域が健全に維持されるには、流域の人の営みも健全に維持される事が大切です。限界集落が増えている現在、流域と全国からの支援を繋ぐコーディネーターが地域に確保できる仕組みの必要性を痛感しています。

埼玉県内河川 P40

団体名： 埼玉県県土整備部水辺再生課

Tel： 048-830-5116

E-mail： a5110@pref.saitama.lg.jp

主な活動： 川は埼玉県にとって大切な資源です。川の再生の取組を通じて、県民誰もが川に愛着を持ちふるさとを実感できる「川の国埼玉」の実現を目指しています。水辺再生100プランや川のまるごと再生プロジェクトにより、河川環境整備を行うとともに、多くの人の川への関心が高まるよう、川に親しむイベントなども実施しています。

活動場所： 埼玉県

一言： 川の再生を実施した箇所では、多くの団体が思い思いの活動をしています。また、川のまるごと再生プロジェクトでは、計画づくりから地域住民等とともに進めています。興味がありましたら、お気軽にご連絡ください。

編集者

団体名： 日本河川・流域再生ネットワーク

Tel： 03-6228-3860（公益財団法人リバーフロント研究所内）

E-mail： info@a-rr.net

主な活動： 河川再生をテーマとしたフォーラムやワークショップの開催、技術交流の支援等を行っています。また、河川再生の関連情報を Web サイトやニュースレター等で紹介し、国内外で河川再生に取り組む人々の情報共有の推進にも取り組む他、ネットワークを通じた河川再生の講師・専門家の派遣等の支援活動も行っています。

一言： 河川に興味を持っていただき、この河川を見に行ってみたい、また、もっと知りたいと感じていただけたら幸いです。皆様の活動へのご参加をお待ちしております。

参考文献および図・写真出典一覧

表紙

写真 左上段：多自然川づくりサポートセンター
写真 右上段：埼玉県 県土整備部 水辺再生課
写真 左2段目：芥川・人と魚にやさしい川づくりネットワーク
写真 右2段目：NPO 法人五ヶ瀬川流域ネットワーク
写真 左3段目：埼玉県 県土整備部 水辺再生課
写真 右3段目：川と水辺を楽しむプロジェクト
写真 左下段：下諏訪町諏訪湖浄化推進連絡協議会 総合研究部会
写真 右下段：多自然川づくりサポートセンター

本事例集作成の趣旨

写真 1枚目：草加市環境課
写真 2枚目、3枚目：日本河川・流域再生ネットワーク
写真 4枚目、5枚目：多自然川づくりサポートセンター

荒川クリーンエイド（荒川）

写真すべて：特定非営利活動法人荒川クリーンエイド・フォーラム
図 放水路地図：荒川下流河川事務所
その他すべての図：特定非営利活動法人荒川クリーンエイド・フォーラム

特定非営利活動法人 あらかわ学会（荒川）

写真 表題：多自然川づくりサポートセンター
その他すべての図写真：特定非営利活動法人あらかわ学会

NPO 法人エコロジー夢企画（荒川水系 綾瀬川）

写真すべて：NPO 法人エコロジー夢企画

川と水辺を楽しむプロジェクト（荒川水系 石神井川）

写真すべて：川と水辺を楽しむプロジェクト
図 懇談会で東京都が提案した3つの検討案：東京都 第四建設事務所
図 A案：多様性ある生物と水辺に親しみ、利用できる空間（平面図）：東京都 第四建設事務所
図 川と公園をドッキング 中の島を作り、遊び・学び・潤いの場に：東京都 第四建設事務所

“外来種の駆除”名古屋市山崎川の場合（山崎川）

写真すべて：山崎川グリーンマップ

よみがえれ諏訪湖 -住民の思いを力に変えて-（天竜川水系 諏訪湖）

写真すべて：下諏訪町諏訪湖浄化推進連絡協議会 総合研究部会
参考文献：諏訪湖のあゆみ、諏訪建設事務所諏訪湖浄化プロジェクトチーム、平成14年度「諏訪湖のあゆみ」編集委員、平成14年度、長野県諏訪建設事務所、下諏訪町諏訪湖浄化推進連絡協議会 総合研究部会

芥川・ひとと魚にやさしい川づくり（淀川水系 芥川）

図写真すべて：芥川・人と魚にやさしい川づくりネットワーク

遠賀川式川づくり直方（遠賀川）

図写真すべて：NPO 法人直方川づくりの会

子ども達が描く夢の「宝川」目指して（遠賀堀川）

写真 表題：水巻町教育委員会
写真 水巻：車返切貫の壁に残るタガネの跡：水巻町教育委員会
写真 水生生物・水質調査の様子：水巻町教育委員会
写真 試乗体験の様子：水巻町教育委員会
その他すべての写真：堀川再生の会五平太
参考文献：遠賀堀川とをりを -記録・記憶そして願い-、堀川再生の会・五平太 編集、堀川再生の会五平太

ふるさとの水文化を守り伝える川づくり（松浦川水系 巖木川）

写真すべて：自然と暮らしを考える研究会

五ヶ瀬川流域ネットワーク（五ヶ瀬川）

写真すべて：NPO 法人五ヶ瀬川流域ネットワーク

埼玉県における「川の再生」の取組（埼玉県の川）

図写真すべて：埼玉県 県土整備部 水辺再生課

JRRN とは？

「日本河川・流域再生ネットワーク（JRRN）」は、河川再生に関わる事例・経験・活動・人材等を交換・共有することを通じ、各地域に相応しい水辺再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的に2006年11月に設立されました。

また、日中韓を中心に活動する「アジア河川・流域再生ネットワーク（ARRN）」の日本窓口として、日本の優れた知見をアジアに向け発信し、同時にアジアの素晴らしい取組みを日本国内に還元する役割を担います。

JRRNの詳細は、ホームページをご覧ください。個人会員もしくは団体会員として入会（入会費・会費は無料です）し、一緒に活動してみませんか。

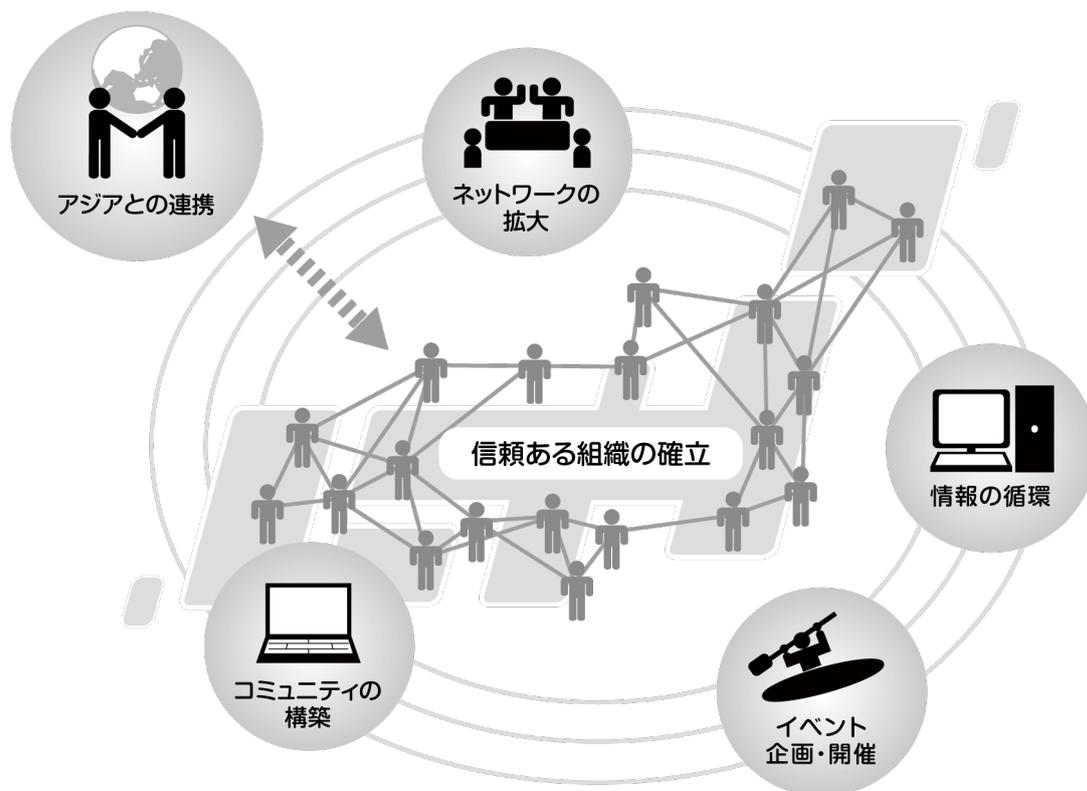
URL：<http://www.a-rr.net/jp/>

❖ ビジョン (Vision)

人々の出会いと誇りに支えられた良好な水辺の保全・再生が創り出す、健全な水循環系及び歴史・文化と共存する地域社会の実現を目指します。

❖ 使命 (Mission)

日本を含むアジアにおける水辺再生の担い手の出会いの広場（横断的な連携基盤）を構築します。



JRRN は、「アジア河川・流域再生ネットワーク構築と活用に関する共同研究」の一環として、公益財団法人リバーフロント研究所と株式会社建設技術研究所国土文化研究所が公益を目的に運営を担っています。

❖ 本書をまとめるに際して、原稿を執筆いただきました皆様、写真提供
いただきました皆様に厚く御礼を申し上げます

川を活かす・守る ～河川再生事例集～

発行 平成 25 年 2 月
公益財団法人リバーフロント研究所
〒104-0033 東京都中央区新川 1 丁目 17 番 24 号 新川中央ビル 7 階

編集 日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN)
佐合純造・柏木才助・木村達司・後藤勝洋・伊藤将文・和田彰

印刷・製本 共立速記印刷株式会社

◎本書は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。

宝くじは、
地方自治体の公共事業等に
幅広く使われています。

ワクワク、
ドキドキ。

あなたに夢を。街に元気を。

クーちゃん

宝くじ

宝くじの収益金は、
病院や検診車、図書館や動物園、
災害に強い街づくり、
緑あふれる公園、美術館など、
皆様の暮らしに役立てられています。